# プレシャス　×　オーシャン

しんどうみずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プレシャス　×　オーシャン

【Ｎコード】
Ｎ１４８９Ｉ

【作者名】
しんどうみずき

【あらすじ】
お宝とロマンに恋する師弟が織りなす物語は、どこまでもはっちゃて、無限大！

## プロローグ　船上（前書き）

この小説は『プレシャス　×　プレシャス』の続編です。
独立した物語としても楽しめますが、出来れば先にお読みください。
（ごめんなさい、リンクの貼り方とかわからなくて……）

# プロローグ　船上

「ちょっと、しっかりやりなさいよね！　全然防ぎきれてないじゃない！」
「そんなこと言われても――それっ――なかなか数が多くて……。てやっ！　師匠も見ればわかるでしょうに」
少年が、また一人敵を薙ぎ払いながら叫び返す。その声は潮風に乗ってとおく地平線へと運ばれていった。大きな波が白いしぶきを立てて船の横腹に衝突する。
船の上特有の、強い風がロートの薄汚れたローブをはためかせていく。厳しい船での生活にもまれて、服はあちこちくすんでいた。
強く握りしめた刀を横に一閃する。
間合いを詰めようとしていた男の一人が驚いて尻餅をついた。
彼の愛剣、インフィニト・ノイテの形状はサーベルだ。
漆黒の刀身は直線ではなく、先頭にかけてやや反り返っている。柄の部分こそ形を変えていないが、手元を守れるように練成されたガードが作られており、かなり趣向の凝ったものとなっていた。やはり、海賊と戦うにはサーベルがよく似合う。
――そう言ったのはイリスで、だからこそ無駄に精巧な作りになっているのだ。ロートが溜息をつきたくなるのも無理はない。
「でも、援護役のあたしにまで敵が回ってきたら意味がないでしょうが！　からだ張ってでも食い止めなさいよ！」
潮騒と怒声に負けないようイリスが大声を出しながら、イリスは今まさに乗り込もうとしていた海賊を撃った。男は大きく目を見開いて、痛みを感じる間もなく海へと落下していく。
その光景を見届けることさえ出来ずに、次の標的に目を移して――。
グラナートを後にして、行くあてもなく彷徨っていた。毎度のこ

とではあるのだが、流石に目標もなく歩き続けるのはつらい。山賊から奪った金品も底を尽きかけて、そろそろ路頭に迷うかと思った時にその話が耳に入ってきた。

とある町はずれの、それなりに人の入った酒場でのことだ。

商人風の口の軽そうな男と、素性の知れないあやしい客が話していた。酒をちびちびとはさみながら、世間話に花を咲かせている。

適度に間をあけられたテーブルは8割が埋められていて、どこに座っている者もやかましく騒ぎたてていた。

「最近はどこも世知辛い。まったく、昔の義理やら人情やら、ロマンやらはどこに消えたんでしょうねえ」

小太りの商人がいった。

顔中が愛想笑いをしている。

「さあ。弱い者が消えて、実力主義の仕組みに変わったんじゃないか。他人に構っているようじゃ、今の時代は生きていけない。僕は運よく勝ち組になれたようだけどね」

「ほんとうに。頭がよくて、能力がある人しか成功しませんからねえ、厳しいったらありゃしない」

二人は軽く笑った。

貴族風の客は気分を良くしたようで、一気に酒を飲みほした。調子よくお代わりを注文した。コップになみなみと注がれた薄茶色の強そうな酒が、すぐに渡される。

自称成功者は一息で半分ほど喉に送り込むと、すこし赤らんだ顔になった。

「ロマンといえば、聞いたことありますか。海神の指輪の噂を」

商人が、さも思い出したようにいった。

客は得意顔で頷く。

「もちろん知っているよ。アスマークに眠っている指輪の話だろう。前に一度、小耳に挟んだことがある」

他になにをするでもなく店内に充満しているくだらない話に耳を傾けていたイリスが、ぴくりと反応した。酒場であるから、子供の

ロートは連れてきていない。
乗せられていることも気づかずに、客が続ける。
「どうせただの出まかせだろうけど。一度でいいから目にしてみたいものだ」
イリスは料金を正確に投げつけると、店を飛び出していた。まるで疾風のような勢いで、夜の中を駆け抜けていく。
紫の長髪が、夜の中になびいていった。
深夜に、夢の世界で楽しく過ごしていたロートをたたき起して、これ以上ないくらいに迷惑げな顔をされたのを知っているのは、静かに夜を支配する三日月だけだった。

早速アスマーク行きの船を見つけたのだが、いかんせんお金がない。そのため、用心棒として乗せてもらうことにしたのだ。腕っ節を証明するために、かなりの数のならず者を相手にしなければいけなかったものの、イリスとロートにかかれば大して時間はかからなかった。
船長も大層驚いて、これなら安心と喜んで雇い入れてくれた。それもそのはずで、航海には賊の出没する海域を通らなければならないのだ。これまでにも、幾人もの同業者たちが命を落としたり積み荷を奪われたりしており、強い味方は何にもまして必要だった。
二人はまさに、救世主といえただろう。
特に準備することもなく、乗船した。船出こそ順調であったが、ついに危険区域に踏み入れると待っていましたとばかりに海賊船が現れ、襲いかかってきた。
その数が尋常ではなく、苦戦を強いられているのだ。輝かしい海上の景色を眺める暇もなく、次から次へと波のように押し寄せる敵は、きりがなかった。
もうかれこれ３０分は戦い続けているだろうか。
彼らは小さなグループをいくつも作っていて、獲物を見つけると近

寄ってくる。そのため、戦闘が長引くと新たなグループからも発見されてしまい、際限がなくなるのだ。
今は完璧に負の連鎖の真っただ中にいた。

## プロローグ　船上（後書き）

続編開始。こちらもどうぞよろしくお願いします。

## 新たな冒険

「ロート、ちょっと来て」
船自体はさほど広いわけでもなく、船頭から船尾まで走って一分もかからないだろう。その中ほどに船室があり、横には階段が付いている。要は二階建てになっていて、その上からイリスは呼びかけていた。
二人のほかにも元から雇い入れられていた者たちが、ちらほらと見える。善戦ゆえか、手傷を負った者はいても倒れた者は一人もいなかった。だからこそ、なんとか積み荷を守り切れているのだ。
「なんですか」
正面の敵二人を相手にしながら、ロートが振り向かずに叫び返す。右側の一人が斧で振りかぶってきたのを反転しながら避けて、黒い刀身を胴に叩き込んだ。鈍い悲鳴をあげて、そのまま動かなくなる。
もう一人も激昂したように武器を振り回しているのを見逃さず、軽く受け流しつつ蹴りを入れる。体勢を崩した男はそのまま落下し、海の藻屑となり果てた。
破裂音のような、最期の波がいくつもの波紋をつくってはさざ波に変わる。
ロートはようやく一息ついて、短い階段を一段飛ばしで駆けあがり、イリスのもとに近寄った。
ついでに近くにいた髭面に一撃を入れて、ノックアウトする。短い悲鳴は、誰にも聞き取れなかった。
「――遅い！　来いと言ったら十秒以内に来なさい。のろまって呼ぶわよ」
「そんなこといっている場合じゃないでしょう。どうしたんですか？」
こんな時に、カモメの鳴く声が聞こえた。

ひょっとしたら、落ちた死体を喰らう魚を狙っているのかもしれない。
「そろそろ疲れてきた。だから一気に決めようと思って。当然、やることは分かっているわよね」
確認というより、既に決定事項だった。
ロートが返事をする前に手にした銃を地面に置き、みるみる巨大化させていく。倍になり、そのまた倍になりついに口径が頭ほどの大きさになったとき、イリスが絶叫した。
「どっけええええ――――――！」
次の瞬間、大砲と化したボニタ・ソニオから弾丸が打ち出され、自船のそばで寄生するようにまとわりついていた小舟に命中した。粉々に砕け散った残骸を呆気にとられて見つめる海賊たちをよそに、イリスはさらに一発、二発と容赦なく追撃をかける。
ようやく状況を呑み込んだ敵がイリスを集中的に狙ってくるが、その前にロートが立ち塞がり薙ぎ払っていく。取り囲むように集まってきた者たちも、手が空いた味方によってどんどん数が減らされていった。
次々に討たれていく海賊。
半数は船の上で倒れ、半数は海の中へ叩きつけられるような衝撃とともに葬られる。サメの餌食となるのも時間の問題だろう。
その間にもイリスは砲撃を続け、ついに残るは船上の敵のみとなった。周りには破壊された木船の欠片がぷかぷかと浮いている。辛くも魚のえさとなることを免れた幸運な者たちがしがみついていて、今にも沈んでいきそうではあるが。
「てめえぇ！　よくも俺たちの船を！　許さねえぞおおおお！」
愛船を撃沈され怒り狂った船長格の男が、いくつも傷の付いたひと際大きな斧を構えてイリスに突撃した。その声を聞きつけてロートが庇いに行こうとするが、まだいくらか残っていた敵によって進路をふさがれ、近寄ることができない。
海風に紫色の長髪をたなびかせ、いつの間にか銃を小型に戻した

イリスは男の攻撃をいとも簡単に避けると、無防備になっている背中に弾丸を浴びせかけた。男は声を上げるでもなく、ゆっくりと倒れていく。
　ボニタ・ソニオの能力で、撃たれた者は痛みを感じないためだ。それに、流血することもない。
「まったく……ロートの役立たずめ」
　盛大にくしゃみをした弟子は実に頑張っているのだが、そんなことは露知らず。
　状況を確認しようと甲板を眺めまわす。敵はどうやら親玉が倒されたことによって戦意を喪失したようで、ほとんどが切られたか海に飛び込むかしている。
　どのみち助かる可能性は万に一つもないだろう。
　生きるか死ぬかの壮絶な世界で生きる猛者の運命だ。
「――あー、疲れた」
　特に問題がなさそうなのを見て、呑気にあくびをする。
　船旅も嫌いではないのだが、どうにも肩がこって仕方無い。原因は歩きまわるには狭すぎる面積にあるのだろう。海の姿も千変万化ではあるものの、一日中見続けているとさすがに飽きが来る。
退屈しのぎも含めて海賊退治を楽しんでいた。もちろん正当防衛であるから、気兼ねなく戦える。
人を殺すのに理由もへったくれもないのは承知してはいるが、敵にもそれなりの覚悟がある。そうでなければこんなに危険な稼業をやっていけるはずがなかった。
「ロート、片付いたー？」
　首を回したり、伸びをしてみたりして体をほぐす。錆びついた関節がいくつか音を立てて、パキペキと鳴るのが聞こえた。
　呼びかけられた少年はちょうど最後の相手を難なく蹴散らすと、イリスの方へ向き直った。あいも変わらずフードをかぶったままで、ピンクの髪は隠されていた。ところどころ、返り血が付いている。
　サーブル型の剣を柄だけの状態に戻し、懐にしまうとロートは返

事をした。
「終わりました。そちらはどうですか」
「言わなくても分かるでしょ。問題なしよ」
それならば、自分だって聞かなくても分かっていただろうに、と口の中でもごもご呟く。
イリスはさして気にとめた様子もなく、髪を撫でつけていた。本人としては軽い運動のつもりだったのだが、少々乱れて気持ち悪かったのだ。
長い髪は絡むことなく、根元から先まですんなりと指が通る。潮風にやられて傷んでいてもおかしくはないので、何もしなくても完璧の状態を保てるというのは羨ましい限りである。
それに加えて、海面の他に見るものがない男たちの目の保養になる、整った美しい顔立ちをしているのだから、女性にしても男性にしても、憧れの的であった。
「ちゃんと血は落としときなさいよ。生臭くってたまらないから」
元から魚のかなり強烈なにおいが漂っているのではあるが、何にもましてイリスは血が嫌いなのだ。その他、苦痛やむさくるしい男も嫌悪している。
ロートもそれを十分に理解していて、なるべく師匠の苦手なものは避けるようにしている。
「わかっていますよー」
肩をすくめながら了解の意を示す。
イリスはそれを一瞥すると、どこまでも広がる大海原に銃弾を一発、撃ち込んだ。
弾丸はどこまで行くともしれず、放物線を描きながら速度を落としていく。ゆっくり、ゆっくりと。川面に投げた小石が抵抗を続けながら沈んでいくように、青い水中へと潜った。
「海神の指輪、か」
倒れた海賊たちを海の中に投げ込んでいく、とても水音には思えない音がイリスの耳に届く。

海鳥の数はさらに増えていて、虎視眈々と獲物を狙っていた。
「舞台は港町――アスマーク」
畳んでいた帆を張り直して、船が風に乗って滑りだす。
目的の地へと。新たな冒険へと。

## 喧嘩

「いやあ、ひじょうに助かった。この航海が成功したのは、ひとえに君たちのおかげといっても過言ではない。積み荷もすべて無事だったし、なにより船員たちがみな生きて戦いを凌ぐことができた。本当に感謝している」

海上の強い日差しを満遍なく浴びて、顔を真っ黒に日焼けした船長が頭を下げた。これまで幾多の海を乗り越えてきた彼だったが、今回の海賊ほど手強い相手には遭遇したことがなかった。そして、イリスとロートほどに頼りがいのある用心棒に出会ったのも、初めてであった。

いくら礼を言っても、いい足りないくらいである。船長の大きくがっしりした手には、ずっしりと重みを感じるほどの金貨が入っている。イリスの視線はしっかりそれを捕えているものの、さすがに手を伸ばすところまではしていない。

「ボーナスといってはなんだが、これはいくらかの餞別だ。ぜひ受け取ってほしい」

「そんな――悪いわ」

と表面だけ取り繕っておきながら、イリスの右手は袋の端を握っており、余程のことがなければ離さないだろう。ロートがやれやれとため息交じりに呟いたのを聞き逃さず、思いっきり足を踏みつける。

涙ながらに怨みがましい視線を送りつけるが、イリスの注意は右手にある報酬に向いており、気がつく様子は微塵もなかった。

もう一つ、溜息。

「では、我々はそろそろ出発するので、ここらへんでお別れと行きましょう」

船長が懐中時計を取り出し、時間を確認しながらいった。

大海原を渡った船はアスマークの港の一角に寄せられ、押しては引いていく波の動きに律義に反応している。時々、きしみをたてて大きく揺れる姿は、流されては戻ってくる貝のようだった。
「それでは。またどこかで会いましょう。この広いフィールドの上で」
埠頭に立ちながら、船からかけた橋を通って船室へと帰っていく船長の背中を見送る。もはや地面ではない木の板を踏みしめていく姿からは海の男としての威厳が漂っているように思えた。
また海鳥の鳴く声と潮騒が聞こえる。浜の香りが肺にたまって、吐き出された。
「さて、到着したし。お金も貰った。次にすることは」
ロートに視線を投げかける。ロートはにべもなく「さあ」と答えた。
弟子の無愛想な態度に、後ろ頭をパコンと叩いてからイリスが続ける。
「当然、現地の食文化を知ることから始めるのよ。基本中の基本ね」
「ただ単に、食べ歩きがしたいだけでしょう」
ロートの的確な突っ込みには、もう一回頭を叩くことによって返答する。再び小気味のよい音が響いた。
立て続けに衝撃を負った後頭部をさすりながら、ロートはイリスを見上げた。
ロートよりも頭一つ分は大きいイリスが何だ、とばかりに睨みかえしてくる。
「文句ある？」
あると言ったら、海に放り込まれるかもしれない。いや、ほぼ確実にそうなるだろうと直感する。
必死に岸へ泳ごうとするロートを、笑いながらボニタ・ソニオで狙い撃つイリスの楽しそうな表情が目に浮かぶ。その光景は、冷や汗とともに拭って消し去った。
「いえ、なにも」

「わかったならそれでよし」
イリスは満足げにうんうんと数回うなずいて、露店のひしめく街並みに目を遣った。色とりどりのレンガで造られた何階建てにもなっている家の前で、売り子たちが特産品とおぼしきものを持って回っている。おそらくは漁師たちの娘なのだろう。
よく日焼けした健康的な娘と、正反対に透き通るような肌を持った女の子が、呼び声を張り上げる。
今まで気づかなかったが、心なしか食欲をそそられる美味しそうな香りがイリスの鼻孔をくすぐった。思わず、ふらりと歩き始める。
なんだろうか。
こうばしい、誘うようなにおいが食欲を刺激する。
「ああ――」
それと同時に空腹が脳内を支配して、手当たりしだいにむさぼり食べたくなる衝動にかられる。幸か不幸か金はふんだんにあるし、わざわざ逆らうこともなさそうだ。
石で造られた埠頭の先から、嗅覚を頼りにイメージ像を描き上げる。
「し、師匠？」
少し濃いめの味で焼かれた新鮮なイカに、魚の燻製。ほかにも、貝類を踊り焼きにしたり、海藻を使ったスープだったり――。
「おーい……」
流石は港町。海の幸が豊富なようだ。
これは食べ応えがある。つばがとめどなく湧いてきて喉を潤した。ごくり、と飲み込む。
イリスは期待に胸躍らせながら、ついに駆け出した。いくらでも進んでいける陸地は何と素晴らしいものであろうか。
呆然と立ち尽くす弟子を尻目に早速、一番近くの店へ飛び込んでいった。
「あー美味しい！」

両手に念願のイカ焼きと、ご当地名物のタコ墨ジュースを持って、イリスが実にうれしそうに踊りまわる。とは言っても今いるのは商店街の真っただ中であり、通り行く人々を避けながらではあるのだが。

こぼれそうになるジュースをうまくコントロールして一滴もたらすことがない。縁のギリギリで黒いジュースが揺れる。こればかりは流石というしか無かった。

自分の師匠をつかず離れずの距離で追いながら、ロートは完全に赤の他人であろうとした。

ただでさえ人目を引く容姿である超美人が、食べ物を手にしながらルンルンと回っていたら、誰でも注目してしまうに違いない。案の定、人だかりこそ出来ていなかったが最も目立っている存在ではあった。

そんな人と関係があるとは思われたくない。ましてや弟子だなんて感づかれるのは最悪だ、とロートは内心考えていた。それでも師弟の悲しいところでイリスを見失うわけにもいかず、適当に間をとっているのだ。

なんだか涙が出てきそうだ。

そういうわけで、熱々のタコ焼きを食べながら、フードをかぶった少年が美女を追いかけるという、怪し過ぎる構図が出来上がっている。それでもロートに人々の視線がいかないのは、彼の位置取りのうまさと、それ以上にイリスが人目を引いているからに相違なかった。

ざわざわと。まれに指をさして耳を寄せあう者もあったが、そんなことを気にしていたら生きていけない。

華麗なステップで一回転を決めると、自然に拍手が沸き起こった。両手を高々と掲げて喝さいを浴びるイリスにロートは冷たい視線を送ったが、珍しモノ好きな群衆の喝さいにかき消されて届くことはなかった。

身の厚いイカをかじりながら、スキップを交えてイリスが進む。

あまりに気分がよかったので、前方不注意になっていた。
「いたっ」
体格のいい大男にぶつかってしまった。質量差が大きすぎて跳ね返されたイリスが、腰をさすりながら起き上ろうとすると――こんな時でもジュースをこぼさないのは、もはや執念なのだろうか――大男がどすの利いた声で、
「おい、どこに目ぇつけて歩いてんだ、姉ちゃんよ」
といった。
あちこち擦り切れた汚らしい服に身を包み、顔には不精髭が雑草のように生えている。毛むくじゃらの腕には傷跡がいくつか付いており、人相は果てしなく悪かった。
普通の人ならば睨まれただけで腰が抜けるか、悲鳴を上げるかしてしまうだろう。
「ちょっと、気をつけなさいよね」
イリスが毛むくじゃらを睨みつけた。完全に悪いのはイリスなのだが、相手が悪そうな奴だと見ればなおさら謝る気はない。それどころか開き直る有様だった。
大男はさらに大声を出して、イリスに詰め寄った。
「ああ！？　ぶつかってきたのは手前ぇだろうが！」
イリスが絡まれているのを後ろから眺めているロートに、動く様子はない。それどころか、何事だと集まり始めた野次馬に紛れて、ゆっくりタコ焼きを賞味している。
これで落ち着いて食べられるというものだ。
「まあ、あんまり怒らせない方がいいとは思いますけどね」
心の奥底で大男に警告を送るが、もちろん当の本人が知る術もなく。
「さっさと謝れ！　そのほそい腕へし折るぞ！」
むりむり、と思いながら一口ほおばる。サクッとした食感は、何度味わっても飽きなかった。
イリスは目つきを変えて立ち上がると、お男に負けじときつい口

調でなじった。
「何言ってんのよ！　ぶつかってきたのはあんたでしょうが。そっちこそ早く謝った方が身のためだと思うけど」
挑発する意味合いも含めて、大男の目をじっと見据える。男の瞳は怒りで燃え上がっていた。
唾が飛びそうな勢いで大男が怒声を発した。
「なんだとぉお！」
それが逆に、自分に冷静さを与えたのだろう。
急にイリスをまじまじと見つめると、いやらしい笑みを浮かべる。その表情を見て、イリスは吐き気がした。
「よく見れば、いい体してるじゃねえか。ええ？　今なら、一晩くらいで許してやるぜ。げへへへ」
もぐもぐと口を動かしながらロートはその様子を観戦する。
小さい子供も見ているだろうに、と思った。
それよりも――。
「調子乗ってんじゃないわよ！　誰があんたなんかに」
その後を言うのは気が引けたのだろう。ロートは少しだけ嬉しくなった。
「そんなことになるくらいだったら、大嵐の日に寒中水泳する方がましね」
よくわからない喩えだったが、それでも大男は多少なりともプライドを傷つけられたようで、
「んだと、このあまぁ！　ちょっと優しくしたらつけ上がりやがって――」
さらに激昂した。
それを見逃すイリスではない。他人の弱点を見切るのでは超一流である。その弱点を正確に攻めるのもまた、徳意中の得意であった。
「るっさいわねえ。この不細工顔が。どうせ彼女いない歴がそのまま人生の長さなんでしょ？」
精一杯の皮肉をこめて、イリスが見下したような態度をとる。

見事に図星なのと、大男の容姿では反論できないのとが重なって、怒りにつながった。もはや冷静な思考は失われ、目の前の女を殴るということしか考えられなくなる。
「この……この……」
言葉もろくに発することができない。
そんな大男の様子を見てもイリスは動じることなく、さらに相手を怒らせようとするかのような素振りを見せる。
「あーあ」
これは乱闘になるな、と呑気に予想する。誰の目から見ても、大男が殴りかかるのは時間の問題であった。
鼻の穴が広がって、呼吸も荒くなっている。眼は見開かれ、かすかに充血していた。握りしめられた両拳はプルプルと震えて、手の平に爪が食い込んでいる。
「かわいそうに……」
完全に他人事で、一分の同情心も見受けられない。
まあ、運が悪かったのだろう。それくらいの気持ちだ。
「何かいいたいことがあるのなら、ちゃんといいなさいよ。この、イノシシ男」
それが決め手だった。顔を真っ赤にして、大きくごつい手でイリスの端正な顔面を捕えようとする。イリスは軽くしゃがんで大男のパンチをかわすと、ジュースを一気に飲み干して、イカを空中に投げ上げた。
一撃目を外したと悟った大男は、今度は蹴りを入れようとする。
「うおらぁ！」
豪快な掛け声と違わずモーションの大きいキックが繰り出されて、イリスの腹に食い込んだ――ように見えたのもつかの間、大男の足はイリスの脇に抱えられていた。
大男が反動をつけている間に上体をそらし、直撃を免れると同時に攻勢に転じたのだ。
「なっ」

自分の太い脚が華奢な腕に挟み込まれ、動かせなくなってことに驚愕する。次の瞬間、もう片方の足を払われて体勢を崩した。頭から思いっきり硬い地面に激突する。

「いたそう……」

今度は同情心が沸き上がるような顔の歪み方だった。これもまた、子供の教育にはよくなさそうだ。

イリスは放り投げておいたイカ焼きを掴み取ると、大男の鼻先に突きつけた。串の尖った先端が、鼻の頭に触れるか触れないかという絶妙な距離で寸止めし、告げる。

「あんたが悪かったんでしょ？」

「ば、ばい……」

圧倒的な実力差を見せつけられて、大男は萎縮した。鼻血がでて、うまく喋れないようだ。

痛めた鼻の頭を押さえながらうつむく。それでも血は止まらなくて、どくどくと流れ続けていた。ぼろきれのような服に点々と赤いしみができる。

「わかったならよし。あたしの前からすぐに消えなさい」

屈辱的なセリフに再び怒りを伴った瞳で睨みかえすが、すぐにしゅんとなってふらつく足取りで歩き始めた。二人の乱闘劇を取り囲むようにして見守っていた人々が自然と道を作り、そこをとぼとぼと情けない格好で去っていく。

ロートはちょうど最後のタコ焼きを食べ終えて、満足だった。

## 大切なもの

イリスが旅先で重要視するもの。それは三つあるのだが――。

「買い物。お宝。それから宿よ、宿」

すでに前の二つは達成している。お宝はまだ入手こそしていないが、情報があれば充分であった。残るは宿のみである。

これまでしばらく魚臭い船室での寝泊まりだったため、清潔で暖かい寝床が恋しい。美味しいものは存分に堪能したので、後はぐっすり眠りたかった。

「寝不足はお肌の天敵だからね、あんたも気をつけなさいよ」

「わかってますよ」

別に美容とかには興味ないですけど、と付け加えて。

最近では男の子でもだいぶ外面を気にする人が多いようだが、生憎ロートは一向に構う様子がない。それでも綺麗な肌を維持できてしまうのは運命のいたずらだろうか。

どんなに派手なパフォーマンスでも、時間がたてば興味がそがれていく。あれほど群がっていた野次馬たちもいつの間にか姿を消し、今や通行人のみが道に溢れていた。お腹がいっぱいになって幸せな気分で合流したロートと一緒に露店を冷やかしてみても、「あ、さっきの人かい？」と聞かれるくらいで、言われれば思い出す程度だった。

目立ちたがり屋のイリスとしては、それは不満なことであったが、完全に忘れ去られていないだけよかったのだろう。そんなことをのんびりと考える。

「どこかに安くて奇麗な部屋はないかしら……。これが決まらないことには何事も始まらないわ」

「さっき物凄く食べまくっていたじゃないですか」

イリスはロートの言葉を華麗に無視して続けた。

「どこかに情報収集しに行くわけにもいかないし。困ったわねえ」
顎に手を当てて考え込むふりを見せる。実際のところ考えるよりも行動した方が早い問題ではある。
そんなイリスの様子を気にせず、ロートは辺りを見回す。
海側から覗った限りではさほど窮屈には感じなかったが、少し中心部に近づくと色とりどりだったレンガも古びて赤茶色に変色しており、なんだか薄暗かった。
通りに面した建物はほとんどが酒場だったり雑貨屋だったりして、様々な形をした看板が掲げられている。扉だけは木でつくられており、中には開きっぱなしの物もあった。その上には小さいランプが取り付けられ、夜になれば点灯するようになっている。
もっとも、店になっているのは一階部分だけでそれより上の階は住居になっているようだ。洗濯物が干されていたり、植木が飾られていたりして生活感を味わうことができる。今も小太りのおばさんが出てきて、ロートたちの頭の上で世間話を始めた。
ふと、四角い看板が目に入る。
「宿屋――ウミネコ亭。いつでもお待ちしています、か」
「うん？　何かいった」
ロートが看板を指さすと、イリスは笑みを浮かべた。
悩み事が解決した顔である。
「流石はあたしね。目に映るものすべてが有意義だわ」
「いや、最初に見つけたのは僕……」
「ぶつくさ言ってないで、さっさと行くわよ」
どうやら今日のイリスは絶好調のようだ。他人の話など全く耳に入っていない。それでいて大切なところはしっかり聞いているのだから大したものである。
ロートの腕を引っ張りながら、イリスはウミネコ亭と書かれた扉を開く。案外、滑らかに動いて少々驚いた。よく整備されているのだろう。
窓の明かりだけでは足りない光を、天井から吊り下げられたラン

プで補っている。中では可愛らしい少女――ロートと同じくらいだろうか――と、気丈そうな女将が机をはさんで楽しげに談笑していた。

入ってきたイリス達を見て、「いらっしゃい」と声をかける。

左奥には階段があって、二階へ行くにはそこから昇るらしかった。

お世辞にも広いとはいえないが丹念に掃除された一階には少女が使っていたのとは別に、いくつかテーブルが見受けられる。階段の手前にカウンターがあることから想像すると、どうやらここは食堂でもあるのだろう。

昼飯時ではないので客の姿は見えない。

「あんた達は――見ない顔だね。泊まりに来たのかい？」

女将が狭い店内を移動して、カウンターに設置された椅子に腰かける。その間、少女はにこやかに立ち上がって、ロートに話しかけた。

「こんにちは」

まさか初対面の相手に親しげな態度をとるとは思ってもいなかったので意表をつかれたが、内心に押し隠して挨拶を返した。

「こんにちは」

「アスマークに来るのは初めて」

少しウェーブのかかった金髪を肩まで垂らし、黒いカチューシャをつけている。猫を思わせる大きく愛らしい瞳はじいっとロートの顔を見つめていて。同じくらいの背丈だったためか、なんだかより一層親しげに感じた。

ロートは、こくりと頷く。

「ついさっき到着したばかりなんです」

イリスと違って人見知りの強いロートが初対面の相手と口を交わしている。珍しいこともあるものだ、と横目で様子をうかがいながら思った。

ひょっとしたら恋の予兆かもしれない、とかなりの早とちりを展開させる。当のロートはそんなこと知る余地もなく。

「そうなんだ。やっぱり船で来たの？」
アスマークを目指そうとすれば、陸路と海路の両方が考えられる。ただ、圧倒的に海を使う者が多い。イリス達の乗ってきた船は都合上、危険な海域を通ったが他にも道はたくさんある。安全で、海賊もいないようなところなので、行きかう船の数も多い。
海における交通の要所に位置するのも、大きな理由の一つだ。
「そうです。なかなか大変な船旅でしたけどね……」
ボニタ・ソニオを変形させて次から次に敵船を轟沈させていくイリスの姿が思い浮かぶ。
できれば二度と経験したくはない。
「大変だったの？　酔ったとか？」
小首をかしげ、くりくりと眼を動かす。
普通は同年齢の子供が死闘を繰り広げているとは思いもよらないだろう。
イリスが声をかけた。
「さ、あたしは先に部屋行ってるから。ちゃんと調べること調べておいてね」
ウインクをひとつ送って、鍵をくるくる回しながら階段を上っていく。口笛も吹いて、機嫌はいいようだ。
イリスの意図を片鱗しか読み取れず、ロートは海神の指輪について尋ねればいいのだと考えた。別に、趣味だとか名前だとかを訊く気はない。
イリスとの交渉を終えて手持無沙汰になった女将も、にこにこと笑うだけで元の位置に戻ろうとはしない。こちらは特に、妙な誤解を持ってはいないようだった。
「調べること？　なにそれ」
さっきから疑問ばかりである。それだから旅人の話を聞くのは楽しいのだ。
「ちょっと小耳に挟んだんですけど、『海神の指輪』という伝説があるんですよね？　師匠はそれについてだいぶ興味を持っていて、

それで僕に調べろっていったんです」
決して、誕生日だとか好きな食べ物ではない。
「ふーん、師匠さんなんだあの人。ということは――あ、まだ名前聞いてなかった。なんていうの」
「ロートです」
「わかった。つまりロートは、あの人の弟子なの」
本題とはずれていたが、さほど気にならなかった。
「そういうことです」
「じゃあ、じゃあ！　いろんな所に行ったり、冒険したりするの」
まるで我が事のように興奮している。身を乗り出し、黒い瞳を爛々と輝かせて。
外界、というものに興味があるのだろう。この年頃ならば、普通の感情だ。
「……まあ、そういうことになりますね。まだ僕はそんなにあちこち回ったわけでもないのですけど」
いろいろあってロートがイリスに弟子入りしたのはそう遠い昔のことではない。旅路には時間がかかるから、いくつもの街を訪れることはできないのだ。
まだまだ経験は浅い。
「いいなあー。わたしも行ってみたいよ……」
初めて目にする風景に、行く先々で巡り合うであろう数々の人物。それから、味わったことのないような未知の出来事――。
想像するだけでも、楽しくなってくる。
たまに宿泊する客からの土産話をわくわくしながら聞き入った。その度に、浮かびあがる物語。なんと心魅かれることだろうか。
「ねえ、連れて行ってくれない」
無理だ、ということは知っていても抑えきれない衝動。
半ばあきらめた言葉に、ロートは首を振った。
「やめておいた方がいいです。危険なこともたくさんありますから。それこそ、命を狙われるような、ね」

本当に身の危険を感じたことは一度や二度では済まない。
憧れと現実は大きく違うものだ。
「そうなの……？」
単に港町の一少女にとっては、命の危機と言ってもなかなか想像しにくい。人生の中で、本当に死ぬかもしれないと思ったことすらあるものかどうか。
夢を壊すこともないのだが、ロートは大きくうなずいた。それでも、表情は優しい。
「そうです。将来、旅行に行くくらいがちょうどいいと思いますよ」
楽しいことだけを追い求めるのなら、それは実に面白いものになるだろう。友人たちとワイワイやりながら観光名所を回遊するもよし、一人で気ままにふらりと出掛けてみるもよし。
「流石に生活そのものが旅というのはきついものがありますから」
ある一つの個所にとどまってゆっくりと人生を過ごす。それがどんなに楽なことか。
人は本能的に、ないものを求めるけど、必ずしも正しいものを求めるとは限らない。無知なだけ、なのだ。
「でも……羨ましいなあ。後悔とかはしてないんでしょう」
ロートの表情を見ていればわかる、といわんばかりの口調で少女が訊く。
後悔、と口に出して呟いてみた。どうにもしっくりこない。
「たぶん――ないのだと思います。もし、僕が師匠についていかなかったら、という未来は存在してないし、それが今よりも良いものだとは考えられませんね。つまり――」
意外と満喫しているのかもしれない、この人生を。
今更、どこかにとどまって暮らそうとは微塵も思わない。
「――後悔してないんだ……。すごいね、わたしと同じくらいの年なのに、ロートはとても立派。すごくオトナな雰囲気がある」
少女がロートの言葉を引き継いだ。興味や羨望といった感情はいつの間にか尊敬へと形を変えていた。

盛り上がった空気とは違って、少し落ち着いたムードが流れる。少女は力を抜いたように椅子に座った。それにつられて、ロートも向かい側に腰かける。

「このお店にも何回か旅人の人は来たけど、ロートより若い子は見たことがなかったと思う。みんな、さっきの師匠さんくらいか、それよりも老けていたから」

「うーん……」

ロートくらいの若い旅人は、居ることには居る。ただ人数が少なく、一人では不安も多いので大抵は師匠をつくっているのだ。

「僕より若い人もいないことはないですけど……確かに少ないですね。僕も見かけたことはありません」

「やっぱり。でも、そう考えると更にすごいね」

少女がロートに拍手を送る。ロートは少々照れくさくなって、鼻の下をこすった。

大したことないですよ、と小さく呟きながら。

「あ、そういえば。海神の指輪について聞きたかったんだよね？すっかり忘れていたよ」

ひとしきり感心してから、少女が思い出したようにいった。

えへへ、と笑い声を上げる。

「いえいえ、別に気にしていませんよ」

話題がそれているのをわかっていて、少女に付き合ったのだ。それに、今は特に急ぐ必要もない。ゆっくり親交を深めながら、探せばいいから。

少女は、そう？　と相槌を打ってから話し始めた。

「んーと、わたしもあんまり詳しいことは知らないんだけどね――」

そう前置きして、時々記憶をたどるように空中を見つめながら喋る。

「昔々、ここらへんの海はセライラス、っていう暴れん坊な神様が治めていたんだって。街の人は我慢しながら暮らしていたんだけど、セライラスはやっぱりひどい神様で、海は荒すし船は沈めるし。で、

みんなから嫌われていたらしいの」
「セライラス――ですか。でも、街の人はセライラスが居ることを知っていて移り住んできたのでしょう？　それなら逆恨みと言うか、何と言うか……」
「それがね、セライラスはアスマークが造られてからやって来たの。だから、街の人々は何度も追い払おうとして闘ったりもしたんだけど、なにせ相手は神様だから敵うわけがなかった」
海を渡り、決死の思いで突撃しては儚くも散っていった。藻屑と消えたのである。
強大な力の前に人はなすすべなく、小さな反発のみが延々と繰り返される。港町なだけあって、海が使えなければ廃れていくのは火を見るよりも明らかだった。
「そんな時、たまたま賢者さんが通りかかったの」
「賢者か……すこぶるタイミングがいいですね」
「噂を聞きつけてきたのか、それとも本当に偶然ふらりと現れただけなのか。それはわからないんだけどね」
少女は、ちょっとだけ笑った。
とにかく、住民はこぞって懇願した。賢者もその惨状を目の当たりにして、心を動かされた。
「で、その賢者がどうにかしたわけなのですね」
話の流れからするとそうだ。
少女も、頷いて肯定の意を示した。
「その通り。で、その賢者さんが持っていたのが『海神の指輪』なの。まあ名前は最初なくて、後からついたものなんだけどね」
指輪の効力は絶大で、たちどころにセライラスを封じ込めてしまった。住民たちは大喜びして、街はしばらくお祭り騒ぎだったという。
だが、賢者の表情は晴れなかった。
「やっぱりそこは頭のいい人でね、人の暗い部分もしっかり理解していたの」

今は単純に喜んでいるが――。
「やがて指輪の力を悪用する者が現れる、そう確信していたのよ」
「なるほど……それは、そうなるでしょうね」
人の心は変わり易い。それに、誰か一人でも悪人がいれば平穏は崩れてしまうのだ。
「ね？　とてもよく分かっているでしょ。でね、賢者さんはもう一つ『鏡』を渡していったの」
「鏡、ですか？」
指輪の話は耳にしたが、鏡というフレーズは初めてだった。
少し声を大きくして訊き直す。
「そう、鏡。今は教会に置いてあるんだけどね。後で見に行ってみるといいよ、たぶんわたしよりも司祭様の方がいろいろ知っていると思うから」
教会は海沿いに西へ進んだところにある。
その情報を得た所で、ようやくイリスが戻ってきた。
なにやら楽しそうな微笑を口元に浮かべて、ロートと少女を温かく見つめる。その視線にどんな意味が込められているのか、ロートは知らない。
「どう、なにか分かった」
「どうやら、指輪のほかに鏡があるようです」
ロートが生真面目に答える。予想通りというか、期待はずれの返事にイリスは、
「ふーん」
とつまらなさそうな声を出した。
階段を降りるたびに靴音がなって、木で造られた床が軋みを立てる。女将がイリスの姿を確認して、
「どうだったい？　部屋の方は」
「上々ね。文句はないわ」
「そうかい」
短いやり取りを終えて、ロートの肩をつかむ。

「さ、その鏡とやらを見に行くわよ。準備しなさい」
「準備と言っても――僕はこのままで十分出かけられますけど」
「それならいいわ。さっそく出発しましょう」
内開きのドアを一足先に潜り抜けようとするイリス。後を追おうとして、ロートは大事なことに気付いた。
「すみません――僕もまだ名前を聞いていませんでした」
「ヘアン、だよ」
「ありがとうございました、ヘアン」
ロートは少女――ヘアンに礼を言うと、スキップで進むイリスについていった。

「ふう……」
「どうしたんだい？　溜息なんてついて」
ロートが去った後の、まだ温もりが残る椅子を眺めながらヘアンが大きく息を吐く。それを見かねた女将が怪訝そうな顔をした。
「すごいよね……わたしと同じくらいなのにさ、あちこち冒険して、闘ったりしてるんだよ。そう思うとなんだか……」
もう一回、嘆息する。
女将は肩をすくめて、
「お前にはお前の人生があるんだから、気にすることはないよ。それともあれかい？　ヘアンも旅に出そうか？」
悪戯気に笑う。ヘアンはあわてて首を横に振った。
「い、いいよ。そんな――」
ウミネコ亭のがらんとした食堂に、女将の笑い声が響いた。

## 封印の鏡

おそらくこれも船で遠い地からはるばると運ばれてきたのだろう、道に敷き詰められた小石を踏みしめながら鏡が置かれているという教会を目指す。

アスマークは海の南側に位置している。つまり、海に向かって左手側に教会はあるのだ。ウミネコ亭を含む商店街――住宅街でもある――は丁度アスマークの中央部に位置し、港までは一直線に道がのびている。イリスは一度海岸に出てから教会に進もうと考えていた。

「で、どうだったの？」

イリスがひじで小突きながら言った。

「なにがですか？」

「手応えに決まっているじゃない！　脈ありなの？　なしなの？」

「はい？」

訊かれていることが理解できず、素っ頓狂な声を出す。イリスは、「照れちゃってー」と、相変わらずロートの肩のあたりを叩いている。

心なしか、歩調が早い。

「さっきの子、ヘアンちゃんだっけ？　なかなか可愛い娘だったしね。当然、趣味とかは調査済みでしょ？」

「……ひょっとして……僕に変な気があるとか思っていません？」

ロートが眉をひそめる。イリスは、もちろんそうだけど？　という表情で頷いた。

「大丈夫よ。恋愛感情は決しておかしいことじゃないから。自分に素直になりなさい、それが勝利への方程式よ」

全く当てにならないようなアドバイスをさらけ出す。

勘違いも甚だしい。

「……はあ」

しっかりとイリスの耳に届くよう、大きめの溜息をこれ見よがしに吐き出した。
これは恋の病ね、と決めつける。愛しい人のことを思うと、自然に憂鬱な気分になるものだ。ロートもまさにその状態にあるのだろう。
一人で合点して、心の中から応援を送る。がんばりなさい！　と。
「僕は、別に……スキとかそういうことじゃないですから」
イリスの誤解を直すにはいったいどれくらいの時間がかかるだろう、と計算する。はっきりいって、めどが立たない。最悪、一生解けないかもしれない。
二人の隣を、酒に酔って赤くなっている漁師と思しき男たちが大声で下品に笑いながら通り過ぎていった。アルコールのにおいに、顔をしかめる。
「まったく――未成年に酒の香りをかがせるとは何事かしら」
案外、飲酒させたら簡単に告白するかもわからないな。などと不穏なことを想像する。
ロートは自分の師の顔をまじまじと見上げて、
「今、僕にお酒を与えようとか考えていませんでしたか」
「え？　あ、あはははは。そんなこと微塵も思ってないわよ。――なに？　その全く信じていない瞳は」
時々、異様に勘の鋭いわが弟子に軽い畏怖を覚える。
ロートは肩をすくめて、イリスのじめっとした視線をはねのけた。
「いや、師匠の紫色の目が心情をありありと語っているように思えたもので」
「あんたにはあたしを信じる心ってものはあるの」
ロートの皮肉が利いた口調に、イリスが切り返す。信じない、が正解であるのだが。
今までの言動からすれば、ロートの反応は自然なものだ。それよりも、自分の行動について理解していないイリスに問題があるだろう。

自分に自信がある、というのは自分を見ていない、という裏返しであるのかもしれないけど。
「……微妙ですね」
「なによ、その『微妙』っていう曖昧な答えは」
勿論、師匠であるから信頼していなければついていくことはできない。それでも普段の態度からして――目に余るワガママやかなり自分勝手な所など――全幅の信用が置けるわけでもない。それらを考慮して、微妙と言った。
……なんで微妙としかいえないのだろう。虚しさがこみあげてくる。
「僕の素直な気持ちです」
きっと、反抗期なのだろう。ロート位の年頃なら一度は訪れるはずである。
イリスはわかったように神妙な表情を作った。温かく愛弟子を見守る視線へと、眼差しを変更する。ロートは急に一変したイリスの態度にぎょっとした。

再び、せわしなく往来する船と広い海原の見える地にやってきた。アスマーク全体に漂っている潮の香りがひときわ強く感じられる。海から吹く、磯の波を乗せた風はイリスの長い髪を大きく揺らしている。
昼に近づいて、来着する商船の数も増えているようだ。太陽が昇るように明るくなった雰囲気が流れ、和やかな声も聞こえる。暮らしを立てようと楽器を持ちだして演奏する者もちらほらと見受けられ、いかにも港町といった音楽が海に響いていた。
「鏡、だっけ」
イリスが唐突に切り出した。
ロートの恋愛模様に夢中で、詳しい話はまだ聞かされていなかった。これからその『鏡』が安置されている教会に向かうのだから、予備知識がなくてはならない。

「はい。どうにも海神の指輪のほかに、鏡があるようです。何故だかは知りませんが……」
詳しい話は教会にいるであろう司祭に伺うことにしている。昔話や伝説といった類のものは、その土地の聖職者がよく知っていることが多い。学者がその立場にあることもあるが、やはり地元に根付いた者の方が堅実である。
先祖代々、伝承されている話を訪問者に教えるのも仕事の一つと言えるだろう。
「賢者が人の愚かさを懸念して、なにか対策を練った――みたいなニュアンスでしたけど」
汽笛が鳴る。石炭と積み荷をふんだんに背負った商船が海をかき分け、大きく帆を張って走り始めた。
「賢者か――よっぽど人を信用していなかった、というよりは人の本性をしっかり理解していたんだろうね。でなければ、そんなことはしない」
「そうですね。僕も、師匠と同じ考えです」
ロートは小さく頷いて、つきあたりの角を左に曲がった。その際、少しだけローブが翻って風にはためく。
パタパタ、という音がイリスの耳に届いた。
「にしても、賢者かあ……どんなお宝を持っていたのかしら」
よだれが垂れそうな勢いで、妄想を開始する。ロートは、またかという思いで足を止めた。
「例の指輪をはじめ、着ているローブから、はいていた靴まですごい効能のものばかりだったのよねえ。きっと」
「そんな魔力だらけのものを使っていたら疲れませんかね」
「賢者だから大丈夫よ」
根拠のない自信をひらけかし、イリスはうっとりとした視線をどこともなしに送った。
瞳がいつも以上に輝いている気がする。
「憧れるわねえ……賢者……」

一時期、本気で魔法や空飛ぶ箒というものに熱中したことがあった。結局、現代には伝わっていなかったのだけれど。それでも、羨望の感情は消えてはいなかった。

昔を思い出す。ああ、歳だなあと実感したり――。

「って、あたしはまだまだ若いんだけど！」

「勝手に盛り上がって、勝手につっこまないでください！」

ロートが切り返す。ハタ迷惑も甚だしい。こんな人の弟子をやっていると、やたらと精神力だけがたくましくなっていく気がする。その内、何を聞いても平然と構えられるようになってしまうのだろか。器が大きい、とはちょっとずれているだろう。

「そうよね、ロート？」

自分よりも若い者に同意を求めるのもどうかと思ったが、否定しないと血の海を見るような予感がしたので大きく首を縦に振って肯定の意を示した。

「よろしい、よろしい」

満足したように自分の頬を撫でる。張りのある肌は、未だに老いを知らなかった。なんの手入れもしていないのに、これほど良い状態を維持できるのはなぜだろうか。

時々、自分でも不思議に感じる。その度に、きっと「綺麗であれ」という天啓であるのだろうと納得するのだ。

「……それでも、あんたの方がすべすべなのよねえ。ロート、ちょっとこっち向きなさい」

ろくなことにならない未来予想図が脳裏を駆け巡る。国家予算ほど積まれても断りたかったが、そうもいかないのが悲しいところだ。

ゆっくりと、いやいや振り向く。僅かに距離をおいたのはせめてもの抵抗だった。

イリスはそんなことお構いなしで、あっという間に差を縮めるとフードの下に隠された端正な童顔をしげしげと見つめた。思わず、一歩だけ後ろに足が動く。

「なんですか、いったい……」

どうせ生意気だからつねってやろうとか考えているのだろう。イリスの紫色をした瞳に捕えられながら、さりげなくいつでも防御に移れる態勢をとる。
イリスがその様子に気付いていないことを祈りながら。
「――やっぱり女の子にしか見えないわ」
「ぐっ！」
まさか精神的な攻撃で来るとは。しかも心に深く残る傷跡を的確に抉っている。
大げさとも思えるほどの渋い形相で心臓をつかみ、訊く。
「きゅ、急にそんなこといわなくてもいいじゃないですか。しかも人が気にしてることを……」
自分の悪戯で困る大人達を見守る子供のような笑みを浮かべ、イリスはロートのほっぺたをつかんだ。
「ひゃ、ひゃめて～」
面白がるイリスの術中にはまるように、変な言葉を発してしまった。つねられているので、うまく喋ることができない。
実に愉快だ、とばかりにイリスは笑った。そして、ようやく弟子から手を離す。
赤くなっているところをさすりながら、ロートはうっすらと涙の滲んだ眼を拭った。予想以上に痛かった。
「あんたはもうちょっと男らしくなりなさいよね」
そんなことは痛いほど分かっている。
ロートはふてくされたように、ひりひりとする頬を撫でた。熱を帯びていて、触れると温かい。
「……ヘアンちゃんに嫌われちゃうわよ？」
やっぱりそこに帰結するのか。ロートはしばらくこのネタでいじられそうだと踏んで、大きく嘆息を漏らした。

## 教会

港から十数分ほど歩いたところに、例の教会はあった。どうやら人々から大切にされているようで、白い壁で造られた側面には汚れの一つも見当たらない。

もう随分と長い歴史を誇っているはずなので、改修を繰り返してきたのだろう。

そこまでして守り、敬ってきた物が「海神の指輪」なのだ。よほどのお宝に違いなく、それを想像するだけで踊りだしたくなった。

もちろん、いきなり路上で踊り出すことはできないので足取りを軽くすることにとどめたのだが。

「あれですね、鏡がおいてある教会というのは。なかなか綺麗ですし、お宝にふさわしいですね」

「そうね」

円錐状の緑色をした先端がいくつか飛び出ていて、空に向かって伸びている。ほとんどの教会がそうであるように天井までが高くなるように作られていた。そのため、かなり大きく感じる。

背の低いロートがてっぺんを見上げながら言った。

「なんだか縦に大きい割には、横に狭いですね」

教会の横幅は高さに比べて半分ほどしかない。見た目ほど、中は広くなさそうだった。

イリスは全貌を見つめて、

「ま、教会なんてこんなものよ。とにかく外見を立派にすれば、後は勢いでなんとかなるわ」

「そんなものですか？」

「そんなもんよ」

イリスが言うことにも一理ある。

竜頭蛇尾、というわけではないがとにかく外装を良くすれば入りたくなる。入ってしまえば後は司祭の話術で引きとめて説教なり、

懺悔なり、なんでもありだ。
「重要なのはなるべく多くの信仰者を集めることだから、思わず中をのぞきたくなるような形になっているのよ。で、中は狭くても綺麗に作る」
それはたとえばオルガンの音色であったり、ステンドグラスのきらめきであったり。
長椅子に座っているだけで安心するような雰囲気が、教会には備わっている。
「つまりは、花のようなものね」
「花？」
「だって植物は可憐な花びらで虫を誘って、中の蜜を飲ませるでしょ。そして、真の目的は花粉を運ばせること」
それが、目の前の建物に似ている、と。ロートはすぐに理解して、まじまじと人工的な花を見つめた。
先入観さえあれば、この美しい外壁だって汚れた純白に見えるのだろう。
「そんなまがまがしいものなのでしょうか？　僕には分からないのですけれど……」
イリスは愛弟子を一瞥し、近くに落ちていた石ころを蹴っ飛ばした。コロコロと音を立てて、小石が道を進む。
「あたしたちだって、いちいち花を見て『これは虫を誘うための罠だな』とか思わない。それと同じことよ」
「なるほど」
「ま、細かいことを気にしない方が長生きできるわよ」
そうですね、と相槌を打って。
二人は入口の前に移動すると、中を覗き込んだ。
そこには花粉まみれの柱頭――ではなく、長椅子が並んでいた。中央には通路があって、その横にずらりと取り囲むようにして木椅子が置かれている。パイプオルガンはその奥にあり、教会中に響くようになっていた。さぞかし、美しい音色であることだろう。

美しいといえば、他にも色ガラスがはめ込まれていて。色彩を持たない陽光が、緑や紫、赤といった風に染められていた。床には、聖母とみられる女性が浮かび上がっている。
鏡は右の奥隅にあった。傷一つない、完璧に平らな鏡面がイリスの姿を映し出す。
司祭は丁度、休憩中だったようだ。一段高くなったステージの端で、ゆっくりと腰掛けながら読書をしていた。しわだらけの手で、ページをめくる。
温厚で、優しそうな眼を持った人だった。白髪の本数から推定するに、６０を過ぎたあたりだろうか。
ロートはイリスと顔を見合わせて、それから足を踏み入れた。
「失礼しまーす」
イリスの声に気付いて、司祭が本から目を上げた。そして、柔らかな微笑を口元に浮かべる。見ているだけで心が落ち着くような笑みだった。
「おや、こんにちは。どうかいたしましたか」
「いえ、綺麗なところだなあ、と思って覗いてみたんです」ロートが応じた。
先程の会話の内容はおくびにも出さない。司祭はうれしそうにうなずいた。
「そうですか、そうですか。それならこちらにどうぞ」
そう言って、自分のすぐ向かいにある椅子を指し示す。二人掛けの、簡単な作りだった。それから、思い出したように付け加える。
「あ、すみませんが、私は足が不自由なものでしてね。ご足労ですが、来ていただけますか」
実に丁寧な口調だった。人柄がにじみ出ているようだ。横にはつやのある、腰ほどの長さまである黒い杖を立てかけている。
イリスとロートは了解したふうを示すと、司祭のもとへ歩き寄った。段差の端には足の不自由な彼のために作られた小さな坂があり、不便のないようになされていた。皆から愛されているのだろう。

二人が腰をかけると、司祭が切り出した。ゆっくりとした、落ち着きある言葉であった。
「ようこそいらっしゃいました――この街は初めてですかな」
「ええ」
イリスがにっこりと笑いかける。よい人柄に出会えば、おのずと人は優しくなれるものだ。
「私はこの教会の司祭で、ルイスと申します」
ルイスと名乗った司祭は皮膚の固くなった手を差し出した。その掌は幾人もの迷える者を包み込んできたのだろう。温かかった。
「失礼ですが、あなた達の名前をうかがってもよろしいですかな？」
「イリスです。で、この小さいのがロート」
そう言って、ぽんぽんとロートの頭をたたいた。弟子は顔をしかめる。
「では、イリスさんとロートさん。お見知り置きを」
どうも、と言ってロートが頭を下げる。イリスは椅子に座りなおしただけで、特に挨拶などはしなかった。
「……覗いてみた、とおっしゃっていましたね」
「はい。でも、他に用があるにはあるのですが……」
ロートが応答した。師匠は動静をうかがうばかりで、これ以上何も話そうとはしない。ロートがどう話を運んでいくのか、高みの見物を決め込んだようだ。
「ほほう。用事、ですか」
司祭が目を細めた。彼は小柄で、ロートと同じくらいの背丈だろう。座っているのではっきりしたことは分からないが、目線がちょうど合わさる高さだった。
「僕らがアスマークにきて、小耳に挟んだことなんですけどね。海神の指輪、という伝説です。ルイスさんも、もちろんご存知だと思いますけど」
ルイスはこくり、と小さくかぶりを振った。
「そのことでしたら、街の者よりは詳しくお話しできるでしょう。

なにしろここには、伝説の大賢者様が置いていかれた「戒めの鏡」があるのですから」
心なしか自慢げなルイスの顔。賢者が大賢者に格上げされているのは、いつもその存在を間近に感じているルイスにとって仕方のないことだ。自然に、誇大表現が多くなる。
「戒めの鏡？」
鏡、とはヘアンから聞いていたものの、詳しいことは教えてもらっていなかった。初耳である。
賢者が指輪の力を悪用されるのを恐れて、鏡を置いていったというようなニュアンスではあったのだが……。
「おや、「海神の指輪」の方はご存知でしたからてっきり「戒めの鏡」もご存知かと……これはすみません」
「いえいえ。ルイスさんが謝ることではありませんよ。――それで、その「戒めの鏡」のお話をしていただけますか？」
ルイスはうれしそうな表情を作った。物語を聞かせるのも、久しぶりなのだ。最近ではだんだんと信仰が薄れかけていて、誰かに話す機会も少なくなっていた。
「もちろんですとも――それでは」
ルイスの話の大方はヘアンから聞いていたものと遜色なかったが、幾分耳を傾けていて面白かった。やはり、話術を本業にしているからだろう。直接的に教わるのが初めてのイリスも、口をはさむことなく真剣に聞き入っている。
司祭の言葉には淀みがなく、いかにも語り慣れているといった様子だった。時折、休むようにして作られる間も絶妙で、その場面に居合わせたような臨場感があった。
神聖な教会で語られる伝説。舞台は完ぺきだ。
そして話題が戒めの鏡へと移ると、二人は僅かに緊張を混ぜた表情になった。
「――大賢者様は強大な力を持った海神の指輪が、その内現れるであろう悪人に使われることを危惧しておった。指輪を使えば七つの

海を支配し、全ての大陸を従えることも可能ですからな。つまりは、世界征服ということです」
「世界征服……そこまで強い力を持っていたんですか？」
ロートが訊いた。たかだか指輪一つで簡単に世界を制覇できるものだとは到底考えられない。
ルイスは手を広げて、大げさとも取れるジェスチャーをした。
「なにしろ海神ポセイドンをやすやすと封じ込めるほどの魔力を伴った指輪に、荒ぶる海を支配し、操ったポセイドンが抑え込まれているのだから、それは凄まじい力があることでしょう。我々の想像をはるかに超えるものかもしれませんな」
二つの力が相乗効果となって、更にパワーを増す。これを使えば、なんでも思うがままにことを運べるのだ。心ない人が手に入れれば滅亡への道を招きかねない。
「そういうことで、大賢者様が恐れていることは理解いただけましたかな？」
「まあ、すごく危ないものだということはわかりました」
「そこで大賢者様は街の者に戒めの鏡を渡した。戒めの鏡にもかなりの魔力が宿されておりましてな、なんとかポセイドンを封印するだけの効果があったのですよ」
「ちょっと待って下さい。それはつまり、指輪は何の役にも立っていないということですか？」
ロートが口を挟んだ。
指輪を使わず、鏡だけで用を済ましているのだとしたらいったい何のために指輪はあるのか。
「そういうことになりますな」
ルイスが大きく頷いた。話を続ける。
「――戒めの鏡は指輪ほどの魔力を持っていませんので、かなりギリギリのところでポセイドンを封じ込めているのです。ですから、繊細に出来ておりまして。少し動かしただけで、地震が起こったこともありました」

本当に海神が居たという絶対的な証拠になる。だが、そんなことは問題ではなかった。
「どうして指輪で封印を施さなかったのですか？　それなら災害が起こることもなかったのに」
ロートが問題の核心をついた。
「大賢者様は万が一の事態に備えて指輪を隠していかれたのです。もしも戒めの鏡が割られるようなことがあれば、海神の指輪を使え、ということですな。ただ、かなりの危険が伴うというはなしですが……」
「鏡は悪用できないと？」
「ええ、なにしろ持ち運びが不便だし、制御もしづらい。これを扱うのは至難の業でしょうな」
「――賢者は、鏡を大切にしろといいたかったのでしょうか」
「おそらく……。真に大切なのは、皆で協力し、助けあい、守っていくことなのです。大賢者様はそれを伝えるとともに、指輪の乱用を防いだのですよ。まことに賢明な判断であることです」
ふーむ、とイリスが考え込む様子を見せた。美しい曲線を描く顎に手を当て、肘を太ももに当てている。
たんに悪いものを懲らしめるだけならば、力があればいい。たんに人々を想うだけならば頭があればいい。その二つを同時に併せ持つからこそ、彼は伝説となり、後世に語り継がれているのだ。街を救った英雄として。
どうして人はここまで能力の差があるのだろう。それはきっと、女神の微笑みを受けた者だけが知っているのだ。
「いい話しねえ……。ますます会ってみたくなったわ」
女神のように神秘的な美しさを備えたイリスがいった。
「会うって、誰にですか」
イリスはあきれたような表情を作った。
「決まっているじゃない、大賢者様よ。きっとどこかで不死の秘薬でも手に入れて、この俗世を眺めているに違いないわ。そんなこと

も考えられないような弱っちい脳味噌だったの？」
「……そうですかー」
ロートはのんびりといった。半ばあきらめている状態である。もう何度も経験して、慣れっこではあるのだが。
くくく、と笑う声がルイスから洩れた。好々爺の相好を崩し、腹を抱えている。
「――これは失礼、実に愉快だったもので……」
あっはっは！　会ってから初めての大声、もとからよく響くようにできている教会にルイスの声がさざめきわたる。
ロートとイリスは、顔を見合せて苦笑するほかなかった。

## 帰宅

夜を迎える前に、最後の輝きを放ちながら大きな夕焼けが地平線の彼方へと姿を消していく。低い位置から放たれるオレンジ色の光が、長く細い影を石畳に映しあげている。

ひとつはより長く、ひとつはより短く。

濃度の同じ薄い黒色が並んで、歩くたびに上下する。その大きさは段々と増していって、やがて闇に溶けあう。世界が大きな“影”に包まれるのだ。

「今日はお終いかしらねえ……夜は作戦会議して、ご飯食べて、さっさと寝るわよ。久しぶりの生臭くない寝床なんだから、たっぷり楽しむ！　わかった？」

「なんで強制されているのか理解不能ですけど――僕は特に異論ありません。けっこう疲れていますし。お腹は……まだもうちょっと時間がかかりそうですけど」

アスマークについた際に、イリスの突発的な行動に釣られて屋台をまわりに回ったのだ。だから、空腹というわけでもない。何となく充実した、正でも負でもない感覚。そんな状態が一番、幸福なのだ。

限りない欲求の中で、最も手軽に満たすことのできる食欲。美味しいものを食べればいいだけの話。それでも生きていれば新たな欲が湧く。

「……お腹すいてないの？」

「……すいているんですか？」

驚いたようなイリスの声に、ロートも意表を突かれる。もし空腹なのだとしたら……。ロートの額に冷たい汗が流れる。あれだけ詰め込んでおいて、半日もたたないうちに消化しているのなら、それはもう食べ盛りという言葉ですまされる問題ではないだろう。――

というより、食べ盛りなのはロートの方であるはずなのだ。
　イリスは夕焼けによって赤く染められた頬を膨らませる。まるでドングリを目いっぱいに頬張ったリスのようだ。
「なに考えてんのよ、あんたは。その年頃なら慢性の空腹サイクル真っただ中にいるはじゃない！　そんなんだから線が細いのよ、まったく……」
　怒っているのか、嘆いているのか。ぱんぱんに膨張した頬は徐々に元の大きさに近づいていき、やがてしぼんだ。
「と、言われましても。お腹一杯なのは僕のせいじゃありませんし、体格が良くないのも仕方のないことじゃないですか」
　イリスはロートの細い腰に目を遣る。サイズの大きいローブを着こんでいるためはっきりとは窺えないが、やはり、がたいが良いとはいえない。
「そんなんじゃ将来はジャックみたいなひょろひょろの紐みたいな人間になるわよ。まあ、さっきの筋肉男みたいなのがいいとは絶対に思わないけど」
　ジャック――薄汚れた焦げ茶色のコートに身を包み、常に悩みのない笑顔を顔に張り付けている。旅人にはよく鍛えられた人が多い中で、ジャックは例外的だった。いわゆる、優男である。
　ロートは自分が大人になったときの像を思い浮かべてみたが、うまくいかなかった。未来のことなど、考えていないしどうなるか分ったものではない。
　可能性も、選択肢も無限なのだから。
「……じゃあ、どうなれと？」
「そうね――とりあえず、ありとあらゆるお宝を華麗に、しかも優雅に手に入れることのできるようなイケメンの旅人になってほしいわ」
「師匠の理想図が凝り固まっているだけじゃないですか！」
　イリスは軽く笑ってごまかすと、
「話を戻すけど。あんたはまだご飯を食べる気にはならない。そう

いうことね？」
「もう少し待ってもらえると嬉しいです」
「なら、あたしがあんたの分も食べるから」
えっ！　というロートの悲痛な叫びを背中に浴びながら、イリスはさも楽しそうに声を上げる。艶めく紫色の長髪が、やがて闇へと包まれていった。

どこまでも伸びる橙の地平線の裏へと太陽が姿を消し、ロートとイリスがウミネコ亭につくよりも一足先に夜が訪れた。日が暮れると人は陽気になるか、寝ることぐらいしかすることがないようであちらこちらの酒場から荒々しい笑い声や歓声が聞こえてくる。
ウミネコ亭は宿屋も兼ねているためさほど食事のためのスペースは広くない。それでも少々冷たくなった木製のドアを開くと、常連客とみられる何人かの男たちが居た。
「あ、お帰りなさい」
せわしなく動く金髪の少女がエプロンを提げ、ロートに挨拶した。手には海鮮料理の乗ったお盆を抱えている。見るからに新鮮な、身の引き締まった具が小高く積み上げられていて、イリスは生唾を飲み込んだ。僅かに胃が消化しきれていなかったものが押し流されて新たな食事を迎えるためのスペースが開いていくのを感じる。
ヘアンは急いで盆の上の皿を届けると、ロートに話しかけた。
「どうだった？　司祭はいらっしゃったかな？」
ロートと違って普段あまり使うことのない敬語がスラスラと出てくるところからしても、ルイスが信頼されていることが身に染みて伝わってくる。ロートはルイスの温厚な顔を思い浮かべた。
「ええ、すごくいい方でしたよ。優しくて――」
ちらりとイリスの方を見遣る。皮肉な視線の先の人物はテーブルに乗った料理の数々に全ての思考を持っていかれていて、ロートの冷たい瞳に気付いていないようだった。
イリスの眼には、湯気を上げるタコ墨のスパゲティしか映ってい

ない。
「――えー、優しくて誰かさんとは全然違って。ポセイドンや戒めの鏡についていろいろ教えてくれましたよ。しかも話し上手で面白かったですし」
「あ、そうそう。そんな名前だったなあ――戒めの鏡。すっかりど忘れしてた」
ヘアンが小さな頭をこつんと叩く。舌をちょっぴり出すのも忘れていなかった。
その様子がよく似合っていて、混じりけのない可愛らしさが眩しい。
「現物も見せてもらいましたけど……結構、立派なものでした。あの中に、指輪が封印されているんですよね」
「そうだよー。わたしも何度か見たことあるけど、その度になんだか萎縮するっていうか、なんだか縮こまった様な感覚になるんだよね。あの大きくて圧力のある装飾とか、すごく綺麗なんだけどな」
賢者が置いていったとされる、厳めしくも美しい鏡。その裏にはアスマーク――ひいては全世界を守るという使命が隠されているのだ。自然と見る者たちを威嚇するような錯覚に襲われてしまうのだろう。
それでも華麗で繊細に施された、鏡本体の周りを覆うようにして取り巻く彫刻と、傷一つない鏡面。無機質な平面は現実をそのまま反射して、描きだす。左右は逆でも、本質は同じなのだ。
「あの感覚は僕もわかりますよ。尊敬の中に、畏怖が混じっているというか」
「たしかに、そんな感じだよね。どうしてだろ、所詮はモノなのにね。わたしたちはなんとなく怖がっている」
「それは……」
論理的な説明ができるものなのだろうか。ロートには自信がなかった。ヘアンのいっていることは理解できるのだが、いざ言葉にしようとすると適切な語彙が見つからない。それは肌で感じるもので

あって、頭で考えるべきではないのかもしれなかった。
「たぶん、魔法ですよ」
「魔法？」
ヘアンが驚いたような、それでいて面白がっているような含みがある表情を作った。大きな丸っこい瞳がきらきらと輝いている。
「賢者様がアスマークを守るためにかけていった、とっておきの魔法だと思いますよ」
本当に魔法などというモノが存在して、賢者がそれを使ったのかどうかは分からない。けれどもロートは、魔法だと確信していた。
ヘアンは口の中だけで笑った。
「そうかもね。やっぱり、ロートは面白いよ」
「面白い？」
冷たい、といわれることは多々あっても面白いと評価されるのは初めてだった。ほんのりと温かくなる感覚が、体の芯から湧き上がってくる。滅多にないが、イリスに褒められた時と同じ気分だ。人に褒められるとは、こういうことなのだろうか。
悪くはない。
「うん。面白いよ、すごく」
「どの――」
「ヘアン！　ちょっと手伝って！」
どのあたりが面白いのか尋ねようとした時、カウンターの中で調理を行っていた女将が娘に声をかける。ヘアンは、はあいと返事をしてからロートにウインクした。
「じゃ、ちょっと忙しいからまたあとでね」
すばやい動きでロートのもとを離れる。とは言ってもさほど広い店内ではない。いつでもお互いが目に入る位置にいる。
会話する相手が居なくなり、ロートは隣で今にもよだれを垂らしそうな気の抜けた顔をしているイリスを小突いた。ぴくっ、と反射的にロートに触られた右腕が反応する。
「な、なに！？」

「なにって、そろそろ戻りましょうよ。いつまでもここで邪魔をするわけにはいきません」
入口の正面を塞いでいるのだ。もしウミネコ亭に入りたい客がいたとしても、通りづらい雰囲気だろう。イリスは我にかえって、ようやく状況を理解したようだった。
「……ああ」
納得したような呟き。多分、自分が何をしていたのか記憶がないのだろうな、とロートは思った。夢の中にいたような気分がイリスを取り巻いている。すぐに忘れてしまうけど、幸せな確信。
「そうね、部屋に戻ったらすぐ夕飯にしましょう。もう待ちきれないって本能が騒いでいるわ」
「それはいけませんね。早いとこ食事をとらないと」
空腹によるストレスでどんな八つ当たりをされるか分ったものではない。それに、食欲を満たしたイリスは機嫌がよくなる。どうやら海神の指輪を手に入れるのは難しそうだと悟っていたロートにとっては、好都合だった。幸いお金は船長からもらったものが残っている。しばらくは観光を楽しんで、それから旅立つことになるだろうから、宝を入手できなかったイリスが拗ねないか、それだけが心配ごとであったのだ。
「よし、決まったらさっさと動く」
イリスはロートの背中を思い切り押した。前のめりになって転びかけたロートが抗議の声を上げる。
「押さないでくださいよー」
「文句いってないで、階段登りなさい。あたしに追いつかれたら夕飯抜きってことで」
いい終えるが早いか、イリスが突然駆け出した。ロートまでは距離があるとはいえど、ほんの人ひとり分だ。すぐに抜かれてしまうだろう。
師匠の気紛れなルールには慣れ切っているロートは早々にバックステップで階段まで進むと、一気に中ほどまでジャンプした。これ

なら、晩御飯にはありつけそうだ。

**滑稽な**

目の前に並んでいるのはきれいに積まれた空の皿。どれも容量の多い、大きめのものだ。すでに大半がイリスの口へと放り込まれ、その細い体へと吸い込まれていった。どれだけ食べても太らないような体質なので、カロリーだとかは気にしていない。

それどころか食事に気を使わなければいけないとは、何と不幸なことか、といたわっているのだ。他人から嫉妬の眼差しで見られてもおかしくはない。しかも絶世の美人というわけならば、なおさらだ。

いくらなんでも量をこなすには時間がかかる。イリスが完食するまでに、何組もの客が入っては出ていった。

今現在、ウミネコ亭にいるのはイリスらと、他の宿泊客。

女将が「今日は酒を切らしていてねえ、明日には入荷するからそれまで待っていておくれよ。どういうわけか頼んでおいた荷物が届かなくて。まったく、困ったもんさ」

といっていたのもあって、酒を目当てに集まる飲み客もいない。もっとも、酒代は重要な収入源なので、まず切らすようなことはないはずはないから、実に珍しいことであった。

「よーし、デザートお願い！」

他の宿泊客は各自の部屋に戻るか、別の店に出かけるかしていて。四人掛けの、木目があらい机の並ぶ一階には三人の人影しかなかった。

女将も在庫のないものを補充しに、買い物へ出ていた。

イリスとロートが隣り合わせに座り、仕事を終えたヘアンが向かい側にいる。細い肩にかかる金髪はところどころ乱れていて、給仕の忙しさを示していた。

「はーい！」

ヘアンは元気良く返事をすると、今は留守の女将が作っておいたプリンを運んできた。
「ロートの分もあるよ、ほら」
そう言って、柔らかい黄色とほろ苦い茶色の色彩が美しいプリンを手渡す。揺れるたびに誘うような姿をさらす、甘美な菓子はよく冷やされていて。ロートが受け取った皿も、ひんやりとして心地よかった。
「すみません、ありがとうございます」
頼んでいなかったのに、ロートの分まで作り置きをしていった女将の気遣いに感謝する。甘いものはイリスに負けず劣らず好きだった。
「あら、ずいぶん美味しそうじゃない。ロート、あんたの分もよこしなさいよ」
イリスは一口で四分の一ほど頬張ると、すかさずロートの分に手を伸ばそうとする。矢のように鋭い動きで、危うくえぐり取られるかどうかの瀬戸際で防ぐのが精いっぱいだった。必死にスプーンをはじく。
「いやですよ。自分ので満足してください」
「……なかなかやるじゃない。なら、容赦はしないわよ！」
イリスは本気とも余裕ともとらえられる、不気味で黒い笑みを浮かべる。口の端が引きつっているところを見ると、プリン奪取を防がれたことがよほどショックだったのだろう。先端をつまむようにして持った銀のスプーンが小刻みに震えている。
「いざ、勝負！」
一方的に宣戦を布告してイリスが指先を一閃させようとする。ロートが慌てて防御に徹しようとしたその時、誰かが扉にぶつかる鈍い音がした。つい、物音がした方へ視線を向けてしまう。
その一瞬のすきを逃さず、イリスが柔らかな本体をえぐりとった。ああっ、と声を洩らすのと同時に顔を赤らめたやたらと図体のでかい男が、扉を引いて店の内側へと入りこんできた。足取りはふらつ

いていて、さらにその後ろから幾人もの酔っぱらいたちがやかましく騒ぎながらなだれ込む。
赤ら顔と、顎にはびこった髭。何日間も洗濯していないだろう、垢にまみれたシャツは黒ずんでいる。むき出しになった筋肉の塊のような腕には、白くなった傷跡がいくつもつけられていた。
既視感を覚える、果てしなく人相の悪い大男。奪い取ったプリンのかけらを口に運びながら、イリスは首をひねった。
「ねえロート、あいつらどこかでみなかった？」
「僕もそんな気がしますが……無視の方針で良いでしょうか」
「そうね、余計なことを気にする必要もないわ」
その数ざっと十名。誰もかれもがぐでんぐでんに酔い潰れていて、ヘアンが露骨に顔をしかめた。アルコールの鼻をつくにおいが部屋に充満する。匂いを嗅いでいるだけで、酔っ払いそうだった。
ヘアンは疲れたように立ち上がると、
「すみませんが、うちはもう店じまいなんです。出ていってください！」
と怒鳴りつける。小さい頃から飽きるほど見てきているので、泥酔した客の対応には慣れている。彼らに正論は通用しない。とにかく大声で、締めだすことが肝心だ。外に出しておけば、後はなんとかなる。
ヘアンの怒声もむなしく、男たちは床に座り込んでしまった。困ったような顔をして、ヘアンは後ろを振り向いた。そして、両手を合わせる。
「ごめんなさい。ちょっと手伝ってくれない？　いつもはお母さんがやってくれているから、私だけじゃ力不足で……」
上目遣いで、すがるような目つき。金の前髪に隠された丸っこい瞳が、まっすぐロートのフードの下に向けられている。元より断るつもりもなかった。頷いて、承諾の意を示す。
ヘアンは安心したようで、強張っていた肩の力を抜いた。いまにも寝ころんでいびきをかき始めそうなむさくるしい男たちを一睨み

すると、ロートは立ち上がって声をかけた。とはいっても、もはや言葉が通じるような相手でないことは了承している。とりあえず、手順を踏んでから、ということである。
「……今すぐ退出してください。しなければ、力づくでもかまいませんけど、どうしますか？」
答えは聞かなくても分かっている。ロートの言葉は研がれた氷のように鋭く、冷たかった。
後ろでは、早々と自分のプリンを平らげたイリスが弟子の分をさらって、呑気に現状を見守っている。近頃はこのように単独で行動させることも多い。手間はかからないのだが、見ている側としてははらはらして安心できない。
あくまで態度には示さないが。自分の責任は自分で何とかしなさい、という暗黙の言葉である。
先頭――つまり、もっとも最初によろけながら店に入ってきた大男がロートを見た。本人は睨みつけているつもりであるのだが、いかんせん目に力がない。
「あ～ぁ、なんだてめえ！　おれに喧嘩売ろうってのか！」
異様に声が大きい。節度も限度もないかのようだ。握りしめた拳を頭上でぶんぶんと振りまわして、ろれつの回らない売り言葉を発する。
「いい度胸じゃねえかぁ～！　この俺をホアジー山賊団の頭領だと知って喧嘩を吹っ掛けてくるたぁあな、ええ？」
「山賊団だか何だか知りませんけど、とにかく外に出てもらいますね。じゃあ――」
ロートはマントを被い、腰から柄だけの剣を取り出す。すると何もなかったところから漆黒の線がゆっくりと伸び、ロートの身長の半分くらいの長さになると、扇形に開いた。
今までどんな奇術師でもなしえなかったような芸当を前に、ヘアンが目を見張る。のんびりとデザートをつまむイリスにささやいた。
「あれ……一体どうなっているんですか？　いきなり黒いのがニュ

ーっと出てきて、なんだか広がって……」
「ん？　いつものことだから気にしなくていいわよ――とは言っても無理な話か。あのロートが持っているやつは、インフィニト・ノイテ。要約すると、万能の便利器ね」
本来なら、「略しすぎです」という突っ込みが飛んでくるところなのだが、生憎その役目をするべき少年は酔っぱらいたちの掃除で忙しい。ヘアンに間違った認識を植付けられているとは、微塵も考えていなかった。
「便利器――なんですか？　なんだか剣のように見えるんですけど……」
ヘアンが首をひねる。観察力はしっかりと兼ね備えているようだ。イリスは何の気なしに、
「ああ、普段はそうやって使ってるわね。大正解」
といった。この少女、案外に鋭いのかもしれない。ロートの彼女候補くらいにしか見ていなかったものを、少々評価を上げることにした。
「やっぱり、戦うためですか」
ヘアンの顔にはいつものような明るい雰囲気は纏われておらず、ただ硬く、そして悲哀を感じさせる表情があるだけだった。その眼は、いつになく真剣である。
「そうよ」
武器を使うことに慣れるまで、何度も地獄を味わった。いっそ自分が地獄に落ちてしまえばいいのだと。心が折れては砕け、何とか形を取り戻しては倒される。そんな日々を潜り抜けて、ようやくたどり着いたある意味での境地。
もはや常人には戻れないのだと、自覚している。目の前にいる、戦いといえば親子げんかと街の喧騒くらいしか経験した事のない、純粋でけなげな。少女のような瞳にはもうなれない。
「人を傷つけることもあれば、殺すことだってある。普通、あの子くらいの年齢で自分の手を赤に染めるようなことはいけないのだろ

うけど……でも、現実は想像よりもずっと厳しいのよ。あなたが考えているような、安易な世界とはケタが違うわ」
「……」
ヘアンは小さな唇を真一文字に結んで、俯いている。箒で掃くように大男たちをあしらっている姿と、インフィニト・ノイテで肉を切り裂く影。イコールでは結べない、相反した二つの真実。
裏と表、などという簡単な表現では説明しきれないのが現実なのだ。まだ年端もいかぬ少女にとっては、あまりにも過酷で原色に近すぎる写真。
「そうなんです……ね。やっぱり冒険は――旅人は」
その後は続かなかった。突然、怒り出した大男がロートの顔面に向かって殴りかかったのだ。素面の状態ならともかく、軌道もままならない惰性の拳では当たるはずもなく。
「そんな程度で殴っているつもりですか？　遅すぎますよ」
「んだとぉ！」
激昂する自称、ホアジー山賊団の頭領。ぞろぞろと控えている他の汚らしい男たちも、最高権力者の怒声に背筋を伸ばし、何事かと目を見張る。
ますます温度の下がった、極寒の中で吹雪いているような。射抜かれるだけで凍りついてしまいそうな。
イリスはロートの皮肉めいた辛辣な言動に、嘆息した。また悪い癖が出たかと、内心毒づいた。
「普段はクールなんだけどね……意外と熱くなりやすくて意地っ張りだったりするのよ」
「――そうなんですか」
「まったく、後でお仕置きが必要かしら」
イリスが本気でお仕置きなどというモノをしたらどうなるのだろう。おそらく、というかかなり現実的に再起不能になるのが予想できた。ヘアンの背中に、ぞわりと悪寒が走る。
「あ、あんまり痛いようなことは……しないであげてください」

イリスはしどろもどろになるヘアンの様子をじいっと見つめて。
「ま、今回はあなたに免じて許してあげることにしましょう。ほんとは百万円くらい稼がせるようなのを考えていたんだけど、なしにするわ」
世界中で共通の通貨「円」。どこへ行っても使える普遍の存在。いくつかの紙幣と、硬貨で構成されている。ちなみに百万円といえば、ロートのような少年が一日中、肉体労働をしながら三カ月かかってようやく稼げるような金額である。
「ひゃ、百万円って……本気ですか？」
あまりの金額の多さ、というよりもお仕置きの厳しさに驚く。並大抵の量ではない。
「もちろん本気よ。で、その中からあたしの生活費を半分くらいぶんどって、遊びまくるわ。ほんとに賢いならギャンブルでもやって一気に稼ぐだろうけど、たぶんあの子には無理ね。まじめ一辺倒だから」
鬼畜だ、と。かすかな表情にも出さないように細心の注意を払いながら、心の奥底で呟いた。
こんな師匠と寝食を共にしていたら、精神力は半端ではないものが身につくだろう。そのまえに崩壊してしまわなければいいのだが。
「さあ、そろそろ気をつけた方がいいわよ。ひと波乱ありそうだから――」
イリスの目つきが変わった。ヘアンが視線の先を追うと、今にも実体化しそうなほどに険悪な空気が流れていた。激昂する男たちの粗野な怒声と、ただ一人皮肉な文句を飛ばしているロートが対照的だ。
リーダー格の大男が、ロートの胸倉のローブをつかんだ。小柄な少年は軽々と持ち上げられ、大男と同じ目線の高さまで上昇する。
その拍子に、目深にかぶっていたフードがはだけ、彼が押し隠そうとしていた童顔とピンク色の髪があらわになった。それを見た大男が、馬鹿笑いを浴びせかける。

「なんだぁ？　その情けない顔と髪の毛は？　ばっかじゃねえの！
なっはっはっはっは！」
「あーあ、人のトラウマを刺激しちゃって……。どうなっても知らないわよ」
波乱は嵐へと発達していきそうだ。なにせ、とんでもない地雷を踏んでしまったのだから。
「……」
もはや怒り心頭で言葉にすることもかなわない。ロートは解かれたベールを元に戻そうともせず、無言で大男の腹に強烈な蹴りを喰らわせた。的確に鳩尾を狙っている。筋肉に足がめり込む鈍い感覚が、ロートに伝わった。
「ぐっ……てめえ……」
急所に一撃をもらって、大男がむせこみながらロートを落とした。よろめきながら後ずさる頭領に、周りの子分達が血相を変えて寄り集まってくる。
「ホアジー様！　大丈夫っスか！？」
この大男の名前がようやくわかった。ホアジー山賊団などというよく分からない賊を語っているので、リーダーの名前をとっているのではないかとうすうす感づいていたが、わざわざ自分の名前を誇示するような名称にすることもないだろう。権力の象徴にはなるが、己のネーミングセンスのなさを露呈する結果となってしまっている。
イリスは鼻で笑った。
「単純な名前」
ねえ、とヘアンに聞こうとして、少女の瞳が異様にキラキラ輝いていることに気付いた。そのきらめきはまるで――。
「――素敵……」
「――恋する乙女、か」

## 喧嘩2

頭に血が上っていても、状況を把握できるのがロートの強みだ。
「ウミネコ亭」に迷惑をかけないようにと、はじめにとった行動が酔客を店外へ誘導することだった。
当初の目的がヘアンの頼みで、ホアジー山賊団の面々を追い払うことだったのを考慮すると、ロートに任せたのはむしろ失敗だったのかもしれない。
街灯が夜をほんのりと光で染め、一直線の通りの脇にはいくつもの飲み屋が軒をそろえている。この商店をはしごして、さんざんに踏み倒したあと、ホアジー山賊団はウミネコ亭にたどり着いたのだ。
それはまさに獅子の口の中に飛び込むようなもので、ヘアンとのささやかな憩いの時を過ごしていたロートとしても、本気の片鱗をみせる弟子を相手にしなければならないホアジーにしても、不幸な出来事だったとしか言いようがない。
先を走る影は、その後ろを追う数十の足音よりも速い。さらにその後をのんびりと歩く、二つの人影があった。
「いいんですか？　い、行っちゃいますよ。見失ったら……」
ロートが挑発しながら男たちを引き連れてしまったので、急いでお隣に伝言を頼んでからイリスと追跡を開始したのだ。それでもイリスは走ろうとせず、まったりしている。
「いいのよ、どうせ行くところは決まっているんだし」
「そ、そうなんですか？　事前に打ち合わせとかしているんですね、やっぱり」
「そんなことしてないわよ」
「え……じゃあ、どうしてわかるんですか」
はやる心はイリスの意外な説明によって、どこかに消え去って。かわりに仔猫のような好奇心が心から染み出し、器を満たしていく。

イリスはいつもロートに教えるような、投げやりな態度ではなく一度立ち止まると、石を拾ってアスマークの地図を描き始めた。
今いる大通りを中心に、その先に延びている円形の広場と、そのまた向こうの港。港沿いに細い道をいくらか進むと、ルイスのいる教会に行くことができる。
イリスは広場をトントンと示すと、
「これがなんだかわかるわよね？」
「アスマーク、ですよね」
「正解。で、大人数を相手に喧嘩をするならどこが適当だと思う」
ヘアンは石畳に削られるようにして描かれた白い線の地図を真剣に見つめると、ぼそりと。自信なさげな答えを漏らした。
「……教会……ですか」
「え？」
予想外の答えが返ってきて、イリスが思わず訊き返す。
「だって、人目はないし、一人をたたきのめすには絶好の場所……」
語勢はしりすぼみになって、音をなくした。イリスは諭すように優しく話す。
「まあ、敵側からすればそうだろうけど、今はロートが主導権を握っている状態だからね。自分に有利に働くような場所を選ばなきゃだめよ」
誰でもそうなのだが、慣れないことをすればミスが出る。ヘアンの場合もそうで、間違って逆の状況を考えてしまったのだ。イリスもそれを分かっていて、説明している。だてに師匠をやっているわけでもない。
ロートに接するときは容赦も加減もなくスパルタなのだが。
「だから、そうなると広くて、自由に立ちまわれるようなところだから――」
「――あ、広場ですね！」
今度は確信を持って、断言することができた。ヒントが多分にあったとはいえ、やはり問題が解けると嬉しいものだ。まじめな顔に、

笑みが戻る。
「そういうこと。さ、そろそろ行くわよ。もうじき殴りあっているかもしれないわ」
イリスは立ち上がると、紺色のズボンについた土埃をパンパンと払った。くるぶしのあたりまで覆う、長いズボンで、軽快な動きができるように作られている。アスマークに来るまでの船上でも着ていたものだ。
「殴りあってるって――勝てるんですか！？」
小柄で華奢で、とても腕っ節が強いようには見えない。筋肉隆々の大人たちを相手にするのは、荷が重すぎるだろう。
イリスなら、奥知れない力でのらりくらりと薙ぎ払いそうなものである。なのに、のんびり講義などしていてよかったのだろうか。
「平気だと思うわよ。ひょっとしたらもう何人か気絶させているかも」
「え……うそ……」
たしかに命をかけて戦うこともあるとはいっていた。実力はあるのだろう。師匠のイリスがこんなに余裕を持っているのが何よりの証拠だ。けれどもヘアンは、自分の目で確認しないかぎり信じられそうにはなかった。
「ほら、ぼうっとしてない」
イリスは唖然とするヘアンの手を握った。柔らかくて、さらさらしている。
他人に触れられたことで気を取り戻したのか、ヘアンはイリスを置いて、ロートが居るであろう広場へと駆け出していく。
「まったく――恋は盲目ってやつかしら」
なんだか恩をあだで返された気分だ。これも若さのうちなのだろうけど。

ロートとその他大勢の酔っぱらいたちが居るのは小奇麗な広場で、中心には賢者をかたどった銅像と、そのまわりに流れる噴水が特徴

的だ。水はとめどなく噴き出していて、絶えず水音を奏でている。荒い鼻息と交わって、不思議なハーモニーを作り出している。
白いローブを目深に着こみ、ぴくりとも動かないロートと。わらわらと餌に群がる蟻のようにロートの周りを囲んでいるホアジー山賊団のならず者たちが対照的だ。
不揃いに並んだ輪の列から、とりわけ人相の悪いひげ面が進み出た。途端に、周りがやかましくなる。ロートの頭上で交錯するヤジ。その喧騒に気づいた住人達が窓を開いて、何事かと顔をのぞかせる。
宵は満月。はるか遠くから旅してきた白銀の光が、一度だけの舞台をあらんかぎりに照らそうとしているかのような、夜とは思えない明るさ。等間隔に並んだ街灯は月光にかき消されるようにして、ひっそりと隅に控えている。
海から一晩中とどく強い風が、ロートの長いローブの裾を激しくはためかせる。乾いた音が、湿気た風に乗せられて、街の通りを滑っていった。
ヘアンがその場に到着した時には、踏みこんだら切れてしまいそうな細い緊張の糸が結ばれていて。
無言のぶつかり合いと、視線の火花が散っていた。
「さあて……泣いて謝るなら、許してやらんこともないが。どうする、くそガキめ」
下卑た笑みを浮かべ、喉から唸るような声を出す。まわりを取り囲む観衆もそれに合わせて馬鹿笑いを上げる。
うるさく、耳障りな声。
「さて――僕が謝るようなことは何もしていないはずですけど？」
ロートがとぼけてみせる。挑発しているのだ。ホアジーはすぐに余裕をなくし、顔が赤くなっていく。
「わかっていないようなら、教えてやろうじゃねえの！　てめえはなあ、この俺を馬鹿にしたんだよ！」
「馬鹿を馬鹿といって何が悪いのですか？」
ひょうひょうと言ってのける。

ホアジーは元から大きかった声を理性と引き換えに更に大きくして、
「年上に対する礼儀ってのを体に教え込んでやろうじゃねえの！覚悟しとけよ！」
そう怒鳴りつけると、再び手ぐすねを引いて待ちわびている輪の中へと戻っていく。最初は子分に任せて、弱らせてからじっくりいたぶろうという算段なのだ。
いまにも先陣を切っていきそうな勢いで、子分達がギラギラと目を輝かせる。獲物を狩る肉食獣の凛々しい目などではない。弱者に集団でかかる、恍惚とした表情。
「野郎ども、やっちまいな！」
その号令がかかった瞬間、自制心がなくなったかのように雄たけびをあげて、おそいかかるピラニア。
全ての方向から一斉に殴りかかる。
「やめてぇっ！」
ヘアンが絶叫した。甲高い叫びが石畳を走り、空に響く。イリスはその声を聞くと、咄嗟に走り出していた。長い悲鳴は息が続く限り、止まることなく。
出せるだけの声を出そうとするとき、人は体を九の字型に曲げて、目をつぶり、精一杯に肺の底から絞り出そうとする。後ろから肩をたたかれて、ヘアンは思わずその手を払った。
それでも肩をつかむ手は離れなくて。
「落ち着きなさい、あの子は大丈夫だから」
見知った声だったことに気付いて、ヘアンが恐怖と悲痛で渦巻く顔を上げた。大きな瞳は涙にぬれて、光を反射している。長いまつげもしっとりとして、力無い。
「ほら、見ればわかるわよ」
イリスがロートの居る方向を顎でしゃくる。おそるおそる、ヘアンが顔を向けると、広場に倒れていたのはロートではなく、折り重なるようにしてうつぶせになっている数名の男たちだった。

ロートは辛くも包囲網を逃れ、崩れかかった輪の外側にいる。どうやら無事のようだ。
相変わらずひょうひょうと自然体で構えている。
「……ぐすん」
鼻をすすりながらヘアンはイリスにもたれかかった。そしてゆっくりと立ち上がっていく。
その間にもロートは迫りくる拳をいとも簡単に避け続けていた。かわすたびに耳元で口を小さく動かし、挑発することも忘れない。怒りにまかせた攻撃は軌道が単調で、直線的なのだ。つまり、予測しやすい。
「おそい、おそい」
戦況を眺めていたイリスがポツリと漏らした。あれくらいなら、目をつむってでも戦えそうだ。いや、比喩とかではなく本気で。
「あんなんじゃねえ……」
あたしの出る幕もなさそうね。本当に山賊団なのだろうか。考えてみれば粗野で乱暴で、見事に条件がそろっているのだが、いくらなんでも弱すぎる。

今までイリスは気の向くままに幾多の賊どもをつぶしてきた。
同じ手に入れるということなら、強奪するのではなく鮮やかに盗っていくのが礼儀であり人の道だというのがイリスの持論で、山賊や海賊などといった者たちはそれに反しているのだ。だから、全力でつぶす。
自分の心情にあっていないからと言って排除しようとするのは確かにエゴだろう。異教徒だからと無暗に非難を浴びせかけ、攻撃するのと同じこと。
けれども人はどこかで自分に折り合いをつけなければいけないのも知っている。己を許さなければ、他人を許すこともできない。完璧主義は身を滅ぼす。完全などというモノは少なくとも人間においてはありえないのだから。だから自分がやりたいことをやって、行

きたいと思った道を選ぶ。
結果的に人のためになっているのだから、手加減するつもりはない。
でなきゃ、やってられないでしょ。この世知辛い世の中で。

## ホアジー山賊団

アスマークは漁業と商船の向い入れなどによって成り立っている港町である。カモメが浜風に乗って舞い上がり、埠頭から濃い青色の海面を見透かせば群れて泳ぐ小魚の塊がいる。

街には鼻をくすぐる潮の香りが満ちていて、ちょっぴり生臭い魚が水揚げされていたりする。

典型的な港町。

山賊などという集団が最も似合わない場所だ。それなのに、ホアジー率いるホアジー山賊団はロートを襲っている。海の男にでも転向しようというのか。

時は少しさかのぼり、イリスがヘアンに広場で戦闘が行われるということを説明していた頃合い。ロートに誘われるようにして引き連れられた山賊団が一人を囲んでいた。

少しの間、睨み合いが続いて。先に口を割ったのはホアジーだった。

「俺らがなんでここにいるのか、教えてやろうじゃねえの」

何の脈絡も予兆もない。いきなり話し始めたのである。これにはロートも意表を突かれた。

ロートが黙っていてもホアジーは構わずに続ける。酔っぱらいは時に感傷的になる。なんとも理解しがたい生き物だ。

「最近はどこもしけててなあ、通るのはスズメの涙くらいしかない金をもったやつか、無一文で何も持ってないようなやつばっかりだ。で、そいつらから通行量をせしめているおれ達としては当然収入が少なくなってな。この大人数を養えなくなった」

ならばリストラなり転職なりをすればいいのに。苦境に立たされているからといって何もせずに立っているだけでは世間の荒波にのまれていく。それがたとえ武器を持ち、力を持った者であっても。

感情が乗ってきたのか、ホアジーの身振り手振りが大きくなった。
「金持ちは通らない。行商人も通らない。飯も金も底を尽きた。それでもおれ達はあきらめなかった。辛抱強く節約して、慣れ親しんだ山の中で木の皮をはぎ、キノコを採り、イノシシを狩った。これじゃまるで猟師だ。何のために山賊やってるんだよ、山森の宝を蓄え、きれいな女を抱え、贅沢な暮しをするためだろ？　ええ？」
ホアジーの感情がこもった演説が心に響いて、子分達がほろほろと涙を流し始めた。本当に苦しい生活だったのだ。
うんうんと頷きながら男泣きする山賊達を見て、ロートは不思議な感情を抱いていた。夢を追う方法も人それぞれだ。同じ終点なのに、逆の方向に歩いている。心にわだかまる運命という存在への疑問。なぜこうも違うのか。
「俺達は新天地を求めた。新しい夢と希望をつかむために、な。長年親しんできた、俺らの故郷――山を捨てたんだ。もう俺らに帰る場所はない。行き先は、海だ。大海原を駆け巡り、七つの海を支配する。それが俺らの新しい目標になった」
山がだめだから海とは。何と短絡的な思考だろう。
海賊にもノウハウがある。第一に船を手に入れなければならないし、襲い方も戦い方も大きく違ってくることだろう。先に縄張りを持っている海賊たちとの小競り合いもある。
リスクの大きい、無謀な挑戦。後先を考えてのことではない。踏み出すためにはあえて危険な未来を見ないことも重要だが、計画もなく飛び出していくのは無理がある。
これは放っておいても自滅するな。そう判断する。
「で、今日は記念すべき旅立ちの初日だったんだよ！　目いっぱい酒飲んで景気づけて明日からがんばっていこうって時に、てめえが水を差したんだ！　その意味が分かるか！」
さあ、と首を横に振ってみせる。ホアジーは地面を蹴りつけた。ガリッと鈍い音がする。
「俺らの大切な日をぶち壊しにしたんだ、それ相応のことはしても

らおうじゃねえか」
それはお互い様だという愚痴は胸の奥にしまいこんで。弓で射るようにしてホアジーの顔に付いた傷跡を凝視する。白く、広がった傷。
ホアジーはロートに負けじと睨みかえした。ぶつかり削られていく目と目の戦いが飛び火して、囃したてていた子分達が口をつぐむ。
ヘアンが到着したのはそんな場面であった。

波はいい。押しては引いて、寄せては帰っていく。いつまで見ていても飽きることがない。表面は複雑に反射する光と澄み切った青空に彩られていて、すくいあげたら消えてしまいそうだ。
けれども山賊が殴りかかる様は、押しては避けられ、掴みかかってはかわされる連続だった。小柄で身軽なことを身上とするロートにとって、大型の船のようにぶつかれば破壊力はあるものの見極めやすい拳は脅威ではなかった。
風圧を感じるくらいのきわどい攻防を繰り返しながら、ロートは数に押されていることに気付いていた。
たしかに、誰の拳も食らってはいない。ダメージはないのだ。しかし、それだけなのである。細々と反撃を繰り出すものの、相手を気絶させるほどの一撃には及ばない。
厄介なことに、敵は素手だった。あくまで喧嘩の範囲を超えないのである。
住宅の窓からは一連の騒動に興味を示している住民たちの顔がちらほらと覗いていて、彼の愛剣――インフィニト・ノイテを抜けば、すぐに発見されてしまうだろう。
切りつけて致命傷を負わせでもしたら、即衛兵に捕まって牢獄行きだ。いくら正当防衛といっても相手は何も持っていない。それに対して武器を使うとはどういう量見だ、ということである。
証言もかき集められるだろう。
イリスがその気になれば簡単に脱獄させられるだろうが、ロート

の名前は全国に指名手配される。どうやっても陽のあたる生活は無理だ。
「ちょっとやばいか……でも、あたしは関係ないし」
隣にいるヘアンに気づかれないように舌打ちする。彼らは徐々にひと気のない方へ向かっている。
「ヘアンが言っていたことになりそうだけど」
方向は海に向かって左側。つまり、戒めの鏡がある教会に近づいているのだ。
回避には間合いが不可欠。距離をとり続けなければならない。決定打を与えられないロートがじり貧になっていくのは火を見るより明らかだ。
「まあ、あたしが手を出したら意味ないわ。元はといえばロートがしくじったんだし」
言い訳気味に納得する。
任命責任などという言葉は最初から存在していない。失敗した方が悪いのだ。
強い風が吹いてイリスの紫色の髪を撫でていく。それは同時にヘアンの金色の髪をも浮き立たせて。
冷たい風だった。

うすら笑いを浮かべるホアジーの愉快そうな表情からは、彼が計算してロートを小路へと追い込んでいるのか、それともただ単にいたぶり続けるさまを見て楽しんでいるだけなのか、判断できない。
それでもロートはじりじりと抗うこともできず、蟻地獄に落ちた無力なアリのようにもがき、抵抗する。
風に舞う木の葉が、掴もうとする手をひらひらと逃げていく。時に浮き上がり、時に急降下し、潜り抜けてはバックステップで距離をとる。
そんなことを繰り返している内に、街灯が消え、月の明かりだけが辺りを照らす。時折、雲が満月に覆いかぶさると、ほんのりと光

を放つアスマークの街が小さく見える。
「面倒くさい……なんだか眠くなってきたし、寒いし――かえろうかしら？　あなたもそろそろ戻った方がいいんじゃない？　風邪ひくわよ」
イリスがあくび混じりに言った。前半部分は押し隠して、後半の部分は小刻みに体を震わせる小さな少女に向けて。
「そんなこと……できません。私が変なこと言ったからこんなことになっちゃって――」
固く握った拳は、寒さではないものによってわなわなと揺れている。
責任と無力感。
「でも、こんなところまで来ちゃって、お母さん心配するわよ」
「大丈夫です。出かけるとはいってありますから」
ヘアンはイリスと視線を合わせようとせず、少しうつ向き気味にロートの方を見つめている。半袖のシャツから延びる腕には鳥肌が立っていたが、顔は紅潮している。唇がかみしめられていて、イリスは腕を頭の後ろで組んだ。
「ルイスに一喝してもらおうかしら――あんまり迫力なさそうだけど」
分厚い聖書を膝の上に置きながら、しわの刻まれた相好をくずすルイス。夜は早そうだが、ひょっとしたらこの騒ぎで目を覚ましているかもしれない。足が不自由だから出てこられないだけで。
夜の景色は昼間とはうって変わって、色が映えない。その代り、輪郭や音といった普段とは違う雰囲気を感じ取ることができる。
人が夜になるとうきうきし出すのはここらへんに理由があるのかもしれない。
「そんなことはないんですよ、司祭様は怒るとすごく怖くて。前に一度、教会の中で暴れた人が居て、その時の形相と言ったら――いまでも語り草になるくらい」
「ふーん……じゃあ、起こしてくるか」

自分が手を出すのも辛気臭い。平和的に解決するには、ルイスに頼むのが一番手っ取り早いだろう。
イリスはヘアンの冷え切った手をとった。
「ルイスっていつもどこで寝てるの？」
「司祭様は足が悪いから――たぶん、教会の中に専用の部屋があったと思います」
「そう。じゃあ、目覚めてもらいましょう。このバカ騒ぎもそろそろ納め時だわ」
一瞬、可愛いパジャマ姿でいたらどうしようという考えが頭をよぎって、吹き出してしまった。
我ながらくだらない妄想だ。
「どうしたんですか」
「いや、なんでもないから……ふふふ」
いつか思い出し笑いに登場しそうだ。どうにも脳味噌が飽きてきていることを意識しながら、イリスはヘアンを引っ張る。
その間にもロートは戦闘を継続していた。殴っている方も疲労が蓄積してきたようで、動きが鈍っている。対するロートは伊達に過酷な経験を積んでいるわけではなく、未だステップは軽快だ。タンタンとリズミカルな音を立てながら、回避に徹する。
もう少し我慢すれば、必ず隙ができる。今でも隙があることにはあるのだが、それを狙っていては数につぶされる。
視界の端でイリス達が教会の中に入っていくのを確認する。
何を考えているのか、大体の想像はつく。つくづく人の手を煩わせるのが好きな人だ。単に飽きっぽくて面倒くさがりなだけかもしれないけど。

# 迷宮

イリスが、海神ポセイドンと賢者の対決をかたどった、教会の木扉を押すとそこには既にあたふたした様子で杖を捜している老人の姿があった。昼間と変わらない、白い服と黒い服の重ね着だ。

ゆるやかな坂でつながっている小さな壇上に立ち、小さな白い杖をついている。これは寝室との間を行き来するためのもので、外出する時などはイリスらがあった時に使っていた黒い杖の方を使う。

長い時間、出歩くには長い方がいろいろと便利なのだ。

短い杖を持ったまま、ヘアンが目を見開く。

「あなたは昼間の――イリスさん、とヘアンではないですか。どうしたんです、こんな時間に――というより、いったい何が起こっているのですか、この騒ぎは。なんだか喧嘩のように聞こえますが」

「まあ、簡単にいえば喧嘩です。それで、あなたにとめてもらおうと思って」

イリスは綺麗な曲線を描く肩をすくめた。透けるように白い手で、やれやれというジェスチャーをつくる。

ぐずるような声が聞こえて、イリスが隣を見下ろすとヘアンが濡れたまつげを手の甲で拭っていた。

「私のせいで……こんなことになってしまって……司祭様、お願いします。ロートを助けて下さい」

ルイスが、おやという表情で首をかしげた。そして、眉間にしわを寄せる。

「――そういうことですか。ならば、私が行きましょう。彼が巻き込まれているのなら、一刻も早く救い出さなければなりませんからな」

察しのよい老人だ。

ルイスはあたりをきょろきょろと見回した。イリスは素早く目的

のモノを探し出すと、皮膚の硬くなったルイスに渡した。温厚な司祭は柔和な顔をした。
「おお、それです、それです。これで外に出られます――」
ルイスのよく通る声を打ち破って、教会の扉が壊れそうな勢いで開かれた。最初に飛び込んできたのは、明らかに自分の力だけで動いているのではない少年。
その後ろからなだれ込むようにして男たちの大群が押し寄せる。まるで城に攻め込むかのような、薄暗い教会の中にこだまする雄たけび。その威勢に気圧されて、ルイスとヘアンが後ろに倒れこみ尻餅をついた。その拍子に、鈍い音がなる。
ヘアンが床に座り込んだまま、小さなしゃくりを上げた。
「ロート、あんた何やってんの！　あとちょっとなのに」
堪えきれなかったということだ。
イリスと遭遇した時には油断していたこともあって瞬殺されたホアジー山賊団の頭領であったが、その実力は本物だった。
高みの見物をやめて戦闘の輪に入るなり、ロートの裾を軽々と捕まえて投げ飛ばしたのだ。その馬力は尋常なものではない。
ロートは激しくせき込んで、イリスに顔を向けた。
「あんな怪力、反則ですって！　第一、掴まれたら何もできません！」
リーチの差がある。持ちあげられてしまったら、いくらもがこうと届かないものは届かない。
イリスが叫び返す。
「だったら掴まれないようにすればいいじゃない！」
単純明快な理論である。
それができれば苦労しない。
ロートは、この人には何を言っても無駄だと、既に悟りきっていたはずのことを思い出して。疲労がどっと湧いてくるのを感じた。
「ちょっと、ロート聞いてるの？」
「わかりました。僕が悪かったです。逃げ切れなかった僕が悪いん

です」
棒読み口調。しかし、そんなことをかまっていられる状況ではなかった。
暴力の塊と化した野獣たちが手当たり次第に蹴飛ばし、放り投げ、目に入るものなら何でも壊してやろうとしているのだ。
今まで幾人もの街人が座ってルイスの言葉を賜ってきた長椅子が無残に転がり、中には亀裂の入っているものも見受けられる。ロートはすぐさま立ち上がって、自分の方へ気を引こうとした。
十人ほどが標的を変え、その魔手を休める。
だが、残りの半数ほどはロートの相手を仲間に任せて教会内を暴れ回っている。
「ちょっとあんた達、いい加減にしなさいよ」
イリスは泣きじゃくるヘアンと、腰が抜けて動けないルイスを安全な隅っこに寄せると般若のような形相ですごんだ。美人なほど怒ると怖いものがある。
ロートが、色のついた窓ガラスを割ろうとしていた一人に飛びかかる。
その手には漆黒の刃が握られていた。
インフィニト・ノイテが背中に届くとともに、膝をつく山賊。もう、人目を気にしていられるというレベルではない。自分だけに危害が及ぶのならまだいい。
いまや教会が壊されかけているのだ。手を抜いてはいられない。
「ああ！」
ルイスが悲鳴のような、鋭い叫びをあげた。
動かない体で、懸命に手を伸ばそうとする。しわだらけの手が必死に止めようとする先には、拳を高々と掲げて高笑いを上げるホアジーの、残酷なまでに無知な姿があった。
どんなに声を張り上げようと、届かない指を伸ばそうと、変わらない最悪の未来。
「やめろぉぉぉ！」

老体から絞るようにして出される、悲痛な想い。
それでもホアジーの拳は無残にも「戒めの鏡」を――アスマークの宝物を――粉々に砕いて。すべての光を反射し、世界を映し出していた鏡の破片が無機質な音をたてて床に散らばった。宝石のようにきらきらと輝きを放つ。
ルイスの腕が力なくうなだれて。がっくりと首をたらす。
病的なまでに悪くなった顔色。何かに脅えるように、頭の上からつま先まで震えている。
ぱくぱくと機械的に開閉される口からは、呪文のような呟きが漏れていた。
「――復活する。ポセイドンが復活する……」
「し、司祭様……？」
あまりに異常なルイスの様子。心配したヘアンが、おそるおそる声をかけた。驚きで、涙も止まっていた。
限界にまで見開かれた目が、金髪の少女を見遣る。
ルイスは、はっとしたように首を横に振ると、ヘアンの細い肩をつかんだ。
「今すぐ逃げなさい。なるべく高い所に避難しなければいけない。もうすぐ、この街は巨大な津波に襲われるだろう、それまでにみんなに知らせないと……ヘアン、行ってくれますか？」
「え……」
あまりに急な要請で、返事ができなかった。ルイスが冗談を言っているわけではないのは、よく分かっている。大津波がアスマークに来るなどという光景も、同じくらいに信じられなかった。
別段地震があったわけでもない。たかだか鏡が一枚割られただけなのだ。
海神ポセイドンという存在はヘアンには遠すぎて。その実態が何であるのか、理解しがたかった。
肩にかかる手に、力が入る。指が食い込んで、少し痛む。
「そんな、私にはできません――。イリスさんに頼んだ方が……」

「時間がないんです。はやくしないと、大変なことに――」
「おいおい、何をほざいてるんだ爺さんよ。こんな鏡の一枚や二枚、割れた所で関係ねえだろ？　どうせ金をがっぽり巻き上げてんだから、買いなおせばいいじゃねえか」
イリスの威嚇をもろともせず、酒の力も手伝って傲慢になっているホアジーが下卑た笑いを向ける。
逆恨みというのか、少々怒っているようだ。
絨毯のように広がる破片を踏みつけ、さらに細かく砕く。
「そうだろう？　し、さ、い、さま」
「黙りなさい」
イリスはホアジーの前につかつかと歩み寄ると、声を荒げた。
アスマークに来た理由、それは海神の指輪を探すためだ。そして見つけた宝物が、目の前にいる男によって失われてしまった。頭に血がのぼっているのも仕方無い。
昼間の戦闘を思い出して、ホアジーのなかに屈辱の感情がふつふつと沸きあがっていた。
「だまれだぁ？　てめえ、ちょっと油断してたからって調子に乗ってると――」
唐突に、立っていられないような、平衡感覚を失ってしまうような揺れが地面から伝わってきた。教会の中にいる全員が、姿勢を崩して床に手をつく。
ルイスの言っていた災害が、現実のものとなりつつあるのだ。
「ああ、ついに始まってしまったか……」
ルイスは頭を抱えて涙を流している。生気のない肌に、しおからい雫が伝っていった。
「ポセイドンがよみがえろうとしている。私達はもう駄目かもしれない――」
地揺れが収まった。それと同時にロートとイリスが、
「一体どうなってるんですか？　この揺れは普通じゃありません」
「どうにか防げる方法はないの――海神の指輪はまだ使われてない

んでしょう？　なら、それを使えばいいじゃない」
と、矢継ぎ早に問いかけた。
未だに状況を受け入れられていないヘアンは、板挟みにあってただただ顔を見上げるばかりである。
「そういえばそうですね――。それなら可能性があると思います。ルイスさん、あなたなら知っているでしょう、海神の指輪がどこにあるのかを。アスマークを救うためには、誰かがそれを使わなければいけないんです」
「あることには、ある」
ルイスが苦しそうにうめいた。
「あるなら、早く使わないと」
「だが――そこにたどり着くまでには、つらい道を通らなければならない。文字どおり、イバラの道だ。今の私に、海神の指輪を手にするだけの力はないのですよ……。私の足さえ大丈夫なら、今すぐにでも行くのですが」
ルイスがかみしめた唇は色を失っている。
イリスは悔しそうにうつむくルイスに視線を合わせた。
「だったら、あたしたちが行く」
一瞬、目に希望が宿ったがそれはすぐにくすんでいった。
「そんなことはできません。一介の旅人であるあなた達は偶然この街を通りかかっただけです。もしかしたら命を落とすような、そんな危険な場所に行かせるわけにはいかないのです。今ならまだ間に合います、すぐにアスマークを離れて下さい」
ルイスは一気にまくし立てた。
また地震が起こる。今度のは先程よりも大きい揺れだ。
ホアジーの態度が風船のようにしぼんで、いくらか上目遣いになっている。おぼろげながら、自分の犯したことの重大さに気付いたようだ。
子分の者たちも気まずそうにしている。
教会の外から、近づいてくる人声が聞こえた。だいぶ大人数のよ

うだ。ほとんどは男の声で、がやがやと議論している。滅多に起きない地揺れがあったのと、ロートやホアジー山賊団が教会の方へ向かったのもあって、皆でまとまって訪ねてきたのだ。
室内の惨事の当事者たちはホアジーと同じように、言い逃れできない、調子に乗り過ぎた暴挙に出てしまったことに気が気でない。所在なさげに頭領の情けない顔を見つめ、口をあけるばかりである。
「司祭様、大丈夫か！？」
数人の、よく日に焼けた褐色の肌を持つ男が心配そうな大声をだしながら扉を開けた。空気の流れが通って、割れた窓から風が吹き込む。
外から、炎の明かりが差し込んだ。そして、空白になった窓枠から新たに中を覗き込む顔が増えた。
教会に入った漁師たちは、床にへたれこんでいる山賊とルイスに目をやると、急いで駆け寄った。
それと同時に、外にいる仲間へ声をかける。
「おい、ちょっと来てくれ――！」
「司祭様――にヘアンじゃないか、何やってるんだこんな時間に」
もう夜も深み、子供が出歩くような時間ではない。ヘアンはただふるえながら海の方角を指さすだけだった。
男が首をかしげる。
「あたしたちに、やらせて」
イリスが繰り返した。
男はイリスの、女神に愛されたとしか言いようのない端正な横顔を見ると、
「あんた、昼間の。大立ち回りしてたべっぴんさんか。まったく、一体どうなっていやがるってんだ」
男が頭を抱える。
壊された教会に起こるはずのない地震。畏怖する司祭に震える少女。どうすることもできないならず者に、フードをかぶった少年と絶世の美女。

役者はそろい過ぎていて。まるで事象の方から引き寄せられているかのよう。
「時間がないんです。教えて下さい、海神の指輪までの道のりを」
「海神の指輪だって？」
男が反応した。
「ここには戒めの鏡があるだろ――おあっ！？」
本来あるはずの、シンボル的な鏡は跡形もなく砕け散っていて。残っているのは、虚ろなホアジーのみだ。
「い、いったい何があったんだ！　司祭様、説明してくれるか？」
男の動揺が、一気に加熱した。
しかし、ルイスはもうイリスの方しか見ていなかった。イリスの紫色の瞳が、どれほど頼もしげに感じたことか。長い時間をかけて築いてきた絆よりも、たった一人の旅人の方が絶対的な存在に思える。天才、とでもいえばいいのだろうか。人並み外れたモノを持っている人は確かにいたのだ。
心の中でせめぎ合う希望と良心とが、ルイスの決断を遅らせていた。
ロートがイリスの横から口を出す。
「もう時間がないんでしょう。それに、僕らが行っている間に他の人たちは避難ができる。僕らが居なくなって悲しむ人はいませんけど、この街の誰が欠けても悲しみは生まれてしまうんです。僕も、誰かが泣くような顔は見たくない」
真剣に語るロートにヘアンは何も言うことができなかった。
金髪の陰で弾力のある肌をやさしい涙が伝っていく。言葉で表すよりも、物悲しい想い。
「それは私も同じだ、だが、私は君たちがいなくなるのも見たくはない」
「でも誰かが行かなきゃいけないんです。動かなくちゃ、人は救えない。ルイスさんだってそうしてきたんでしょう」
イリスはロートを手で遮ると喉元まで出かかった言葉を引き継い

だ。
「それはあなたが一番分かっているわよね」
もういいでしょう？　これはもう決まってしまったことなのだもの。
「あたしたちが街を救う。最も似合ってる二人だと思わない？」
強引な説得。
ルイスは重たい口調で、ため息交じりにいった。
「……頼みます」
「よし、了解！」
イリスが胸をバンと叩いた。顔には笑みさえ浮かんでいる。心の底からにじみ出てきた自信はどんな不安さえも打ち消していた。限りある経験から作り出された底なしの確信は、信頼という形になって映し出されるのだ。
「で、さっそく情報をちょうだい。何事も知ることから始まるわ」
「わかった」
ルイスは心を決したようで小さなふみづくえを指差した。もう、後戻りはできない。足を止めたら待っているのは暗闇だ。
「あの中に賢者様の言い伝えが詳細に記されています。中身は暗記してありますが、地図も書いてあるのであった方がいいでしょう」
男が気を利かせて、筒状になった巻物を取り出してきた。青い生地に波のような模様がいくつも描かれている。
くるくると広げると中央に、海の中で暴れる巨人の絵があった。これがポセイドンなのだろう。どこかしらホアジーに似ている。
両手を広げたほどに延ばされた巻物の最後の部分に、迷路のように入り組んだ地図が載っていた。地図なしで挑めば、迷子は必至だ。それに、通路の所々になにやら記号のようなものがかきこんであって、より難解な地図になっていた。
「これです。これが、海神の指輪までの道のりになっています。賢者様が万が一という時のために残していったものなのですが――こんなことになってしまうとは」

「なるほど。じゃあ、ありがたく頂いていくわね」
といって、イリスはロートに巻物を渡した。ロートは一心に内容を読み始める。
「入口は祭壇の裏にあります。そこから歩いてどのくらいかかるか分りませんが……地下迷宮を進んでいけば、海神の指輪があるはずです。それを使えば、ポセイドンの復活を防ぐことができるでしょう。まだ封印が解けきれていないせいか、まだまだ動きは緩慢のようですからな。こうなれば、時間との勝負になります。ヘアン、外にいる人からたいまつをもらってきてくれるかな？」
ヘアンはこぼれた涙を袖でごしごしぬぐうと、わき目も振らずに駆け足で出ていった。その間も、ロートは書面から目をそらさない。
「なにしろ下は光が差し込みませんから。不便なものです」
街には街灯はあるが、いまだに携行する光源はたいまつだ。せめて火ではない何かを使えるといいのだが。
「今は夜だし、あんまり関係ないわよ。それで、入口はどこなの？」
イリスが大理石でつくられた祭壇の裏を覗き込みながらいった。どこにも地下へつながる階段のようなものはない。
「床にへこみのような部分があるのですが、わかりますか？」
規則ただしく並んだ木の板の中に、指が一本入るかどうかという大きさの穴があった。イリスの細い指をかけ、引っ張り上げると塵埃が舞った。どうやら久しく使われていなかったらしい。
「最近はからだが弱ってろくに整備が行えませんでして――クモの巣でも張っているかもしれませんな」
教会の中が薄暗いせいもあって、イリスは階段の最深部まで見られなかった。ヘアンが戻ってくるのを待って、暗闇にたいまつをかざす。
ルイスのいうとおり、入口の付近にはいくつかのクモの巣が張ってあった。
急勾配の階段に気をつけながら、地下へ下りていく。

## なぞなぞ

「転ばないようにしなさいよ。転んだらあたしも巻き添えなんだから」
「わかってますよ」
それならば自分の足元も照らしてくれればいいのに、と思いながらロートが返事をした。
ゆっくり進んでいくにつれて、空気が冷たくなっているのが感じられた。ひんやりと朝の冷気のような冷気が肺を満たす。
最深部に足がつくと、イリスがたいまつを頭の上にかかげた。
随分と長い時間、光を浴びることのなかった通路がその姿をあらわしていた。その横には、何やら液体の入った溝が延々と彫られている。
イリスは怪しげな液体をしげしげと眺めると、指を浸した。ぬるり、という感触が伝わってくる。
「油、ね」
「油ですか。いったいなんのために」
ロートが首をひねる。イリスは子供のように目を輝かせながら、燃え盛るたいまつを油に近づけた。ロートは、ああ、と納得したような表情をつくるとともに、苦笑した。
油に引火して、光の線が迷路の中を走っていく。その様を見ることができたのは目の前の通路が直線である範囲内だけだったが、地下迷路全体が明るくなったのは確実だった。
まったく……これを自分でやりたかったというのだから、子供でしかない。旅人であるためには、いつまでも子供心を忘れてはいけないといわれるけれども、少しは大人の貫録というモノを見せてほしい。
イリスのぱぁあっと嬉しそうに笑う表情を眺めながら、ロートがいった。

「急ぎましょう。時間はないんですよ」
「そんなことといわれなくても分かっているわよ。こんな素敵な仕掛けが施されていたら、やる気が出て仕方がないわ。さっさと踏破してしまいましょう。さ、地図をよこしなさい」
イリスは差し出された巻物をひったくると、ひとり先行して迷宮に足を踏み入れた。
小鳥のように自由気ままなイリスの後をロートもあわてて追ったのだった。

地下の天井はごつごつと硬そうで、何本かつららのように飛び出た岩石がある。教会から延びる地下通路は、海に向かっているようだった。海水が入ってこないのは、伝説の賢者がなにか工夫を凝らしていったためだろうか。
さびれた建物のように、すぐに崩れてきそうな雰囲気はない。ロートはスキップで先を行くイリスの後を、なんとか視界の端でとらえながら追走していた。
直線は、入口の方にほんのわずかにあっただけで他はほとんど遭遇していない。曲がっては進み、曲がっては進みの繰り返しだ。
ロートは前にいるであろう師匠へ声をかけた。
「ちょっと待って下さいよ。迷子になったらどうするんですか」
「なに？　あたしにパンでも撒いていけっていうの」
イリスの声はどんどん遠ざかっていく。
「あっ、出口が見えたわ」
イリスは嬉しさいっぱいといった様子で、光の差し込む扉を指さしている。地図があるとはいえ、迷路を踏破したことで満足したのだろう。その表情に陰りはなかった。
これから大舞台に向かうのに、あまりに能天気なのも問題だろうが。
ロートが小走りで追いつく。息一つ乱れていない。道は入り組んでいたものの、距離はそう長いものではなかった。緊急時には有効

なつくりだ。
「この先にあるのでしょうか」
「あるに決まっているじゃない。こんな意味ありげな詩が書かれてるんだから、間違いないわよ」
「えーと……」
古びた文字が石の扉に彫りこまれている。美しい、流れるような字体だ。詩の周りはさまざまな文様で飾られていて、見ているだけで時間が過ぎ去って行きそうだった。
「――この扉より先にあるものは、時に汝の身を救う宝となり、時に汝の世界を滅ぼす剣となろう。汝、この力を悪用せんとする者ならばその果てにあるものは富でも名声でもなく滅びとなろう。汝、この力を平静と安寧のために使う者ならば、その力は汝を助ける盾となろう。さあ、進め救世主よ。汝が求める指輪はひとつの真実の向こう側にある。嘘と偽りによって生み出された道は、深き海の底へと続く。汝が正しいと思う真実を選べば、自然と道は示されるであろう。汝に幸あらんことを――だそうです」
「なら文句はないわね。なんていったって、あたしたちは正義のためにわざわざ危険を冒してこんな辺境まで来ているんだから。これで罰があたったりしたら、非難ごうごうよ」
イリスが、正義、という部分を強調しながらいった。
「そうですね。急ぎましょう」
ロートが頷く。イリスが扉を押すと、案外スムーズに動いた。これも賢者のなせる技ということだろうか。
油の仕掛けはどこからかつながっていたようで、円形の部屋には炎が灯っていた。前方に、三つの新たな扉がある。それぞれ大きく文字が書かれていた。
ひとつは、金。ひとつは、夢。ひとつは、愛。
部屋の中央には石碑が置いてあった。表面が良く加工されており、わずかな凹凸もない。ロートの身長とちょうど同じくらいの高さだ。そして、石碑には碑文が刻まれていた。

ロートが読み上げる。
「世界に溢れているのに、皆が求めるもの。無限であるのに、貰える者と貰えない者がいるもの。汝の心に、満ちているもの」
まるでなぞなぞのようだ。イリスが真剣な目つきで短い謎かけを凝視する。刻まれた軌跡から、答えを読み取ろうとしているかのように。
「どれもあてはまりそうですね。何が答えでも、おかしくはないと思います」
扉の一文が脳裏をよぎる。汝が正しいと思う真実を選べば、自然と道は示されるであろう。イリスの方を見た。笑っている。もう解けたのだろうか。
「そうね。あたしもそうだと思う。だから、ロート。あんたが好きな道を選んでいいわよ」
「……師匠はもう答えが分かっているんでしょう。だったら、教えて下さいよ」
「いやよ。あんたが考えなさい。あたしはそれに付いていくから」
イリスがいった。ロートは師匠の紫色の瞳をただ見つめていた。どこまでも澄み切った、偽りのない眼差し。空のようでも、海のようでもある。
「そこまでいうのなら、なにか根拠があってのことなんですよね」
「さあ？」
イリスが意地わるげに微笑む。ロートは肩をすくめて、石碑の文章に見いった。
すべてに当てはまるようで、すべてに当てはまらないような気がする。だが、とにかく金だけではないだろう。欲望にまみれた答えを出してもしかたがない。となると後は、愛か夢だ。
――夢、も自己中心的な意味合いがある。それに、ここでは必要のない要素だろう。――ここから導き出される結論は……。
「愛、ですかね」
「ふうん。ならそっちに行く？」

イリスはロートの答えを聞くやいなや、愛と書かれた扉に手をかける。小さな迷える少年は、あわてて制止した。
「もうちょっと持って下さいよ。もし間違っていたらなにがあるか分らないんですよ」
「時間がないって言ったのはあんたでしょう。なら早く決断しないともっと危ないんじゃない。あたしは従うだけだから」
「むう……」
師弟の間で火花のちるような視線のやり取りが交わされる。相手の表情から、しぐさから、瞳から心理をはかろうとしているかのように。
大きな地響きが起こった。ロートもイリスもバランスを崩して、地面に手をつく。石でできた床はひんやりとしていて、自分の手がいかに火照っているか気付かされた。
決意を秘めるように、大きく息を吸い込む。
「――わかりました。それなら、僕はこの道を選びます。――愛を。世界に溢れているのに、皆が求めて。無限なのに、与えられた人と与えられない人がいて。そして、僕が今、想っていること」
静かに、愛と書かれた扉を押した。答えの真意を問うように、ゆっくりと開いていく。イリスはロートの後ろに控えてうすら笑いを浮かべていた。
火ではない他のなにかが光源になっているようで、空間全体が薄らと光に包まれている。心が落ち着くような、懐かしい光。

## なぞなぞ（後書き）

次でおしまいです。

**海**

ロートの開けた扉からは通路が一本のびていた。その先で、十字のように交差している。十字路のさらに向こう側にただならぬ雰囲気を感じさせる指輪が安置されていた。

台座の上に、ぽつんと置かれている。

「あれ……？」

ロートが三本の通路を眺めながらいった。

「これってもしかして」

「なんの考えもなしに、あたしがあんたに任せると思ったの。どれを選んでも失敗はないだろうから、ロートにやらせたの。せかしたのは事実だけどね」

「どうしてわかったんですか。全部が正解だって」

「最初の扉に書いてあったでしょ。汝の正しいと思う道を選べって。それで外れたらあたしは地獄まで行って文句をいうつもりだったわよ。まあ、この街のことは見放すことになるけど」

「ずいぶん危ない賭けじゃないですか」

「あたしの勘に狂いはないわ。ギャンブルじゃ負けなしよ」

そういえば以前、生活費を稼ぐためにかなりギャンブルをしまくった経験がある。その時のイリスは、イカサマで勝ち続けていた覚えがあるが……。

ロートはきらきらと輝く指輪の方へ向き直った。ローブを深くかぶり、イリスにいう。

「クライマックスですね。ここまで来たら、もう引き返せませんよ」

「いわれなくても分かってるわよ。あんたこそ、逃げるなら今のうちよ」

「今さらどこへ逃げろっていうんですか。僕に帰る場所はありませんから」

「そうね。あたしがいなくちゃ何もできない赤ん坊だから、ロート

は」
　これ以上は話していても無駄だと早々に悟ると、ロートは勝手に歩き出した。すぐさまイリスが追い付き、我先にと指輪のもとへ駆け寄る。
　イリスの指にぴったりとはまる大きさの指輪だった。リング全体が透き通った浅瀬のような宝石で造られている。上半分だけが台のそとに出ており、思わず手に取りたくなるような素朴な美しさを持ち合わせていた。
　うっとりと感激の溜息を洩らす。
「こんなものを追い求めていたのよ……。旅人の醍醐味ね。別のいい方をすると、果てないロマンだわ」
「なにをぶつぶつと独り言を」
「ああー、いつまでも眺めていたい」
　目がとろけている。こりゃだめだ。
　夢の世界へ旅立っているイリスの頬をつねってみても、おそらく大丈夫だろう。それより過激なことをしても、ばれない自信がある。
　要するに、ほとんど意識がないということだ。
「さっさとそれを使って下さいよ。早くしないとアスマークが――」
　突如、ロートとイリスのまわりの景色が変わった。まるで、その場所だけ別の空間に転移してしまったかのように。
　あたり一面は海。空には漆黒の雷雲が立ちこめ、せわしなく落雷が海面を叩いている。
　巨大な男が――ホアジーをほうふつとさせる――、渦潮の中心に君臨していた。とにかく怒り狂っている。両拳を力任せに振りまわし、その度に天まで届こうかという水柱がせり立つ。
「――これは……」
　ロートが息をのんだ。
　イリスは周りの様子もお構いなしで、一心不乱に海神の指輪を見つめている。魅力あふれるお宝以外は、眼中にない。凄まじい集中力だ。

目の前に宝石を吊り下げられたら、たとえ罠だと知っていても突撃するだろう。そんな気迫があった。
荒くれた神がどこに怒りをぶつけるとも知らず、吠えた。
たちまちその周囲に、街一つくらいは軽がる飲み込めそうな津波が発生する。
「これが、ポセイドン……」
一刻も早く、封印しなくては。強烈な使命感が、ロートの体を支配した。
「師匠！」
イリスに、叫ぶ。その声と呼応するように、青い指輪が輝きはじめた。
さすがのイリスも、これには驚いた。ぽかんと口を開いて、その行方を見守る。
指輪はくるくると回転すると導かれるようにしてイリスの細い指にはまり込んだ。まるでイリスのために作られたかのような、完璧な大きさだった。
「持ち主を選ぶってことかしらね……」
指輪のはまった右手の薬指から、意志のような力が体を上ってくるのがわかった。その波は腕を伝い、心臓に届き、全身をめぐる。
イリスの頭の中で誰かが話しかける。
「汝は指輪の主に選ばれた。この力、正しい方向へ導くがいい」
賢者の想いだろうか、と直感する。
なすべきことが映像となってなだれ込む。イリスは右手を高々と掲げると、叫んだ。
アスマークに襲いかかる津波を打ち消すように、大海を超えた場所に届くように、ポセイドンを手中に封印するように。
「この指輪に集え。己が暴挙、一手に収めん」
ビジョンからポセイドンの姿が消えた。それと同時に、イリスの指輪の中で激しい力と力のぶつかり合いが起こる。まるで戦争だ。イリスは全神経を指輪にむけている。額には汗がうっすらと浮かび、

鼻筋を流れていった。
ロートはただイリスのことを見ているしことしかしない。彼は信頼しているのだ。自分の師匠を。イリスの力を。むしろイリスが負ける姿を想像するほうが難しい。
それくらい自信があった。
指輪を中心にして空気のうずが形成され、竜巻のように吹き荒れる。ロートは風にフードが飛ばされないように押さえながら、徐々にその威力が弱まっていくのを感じていた。
「……」
無言の戦いが続く。
しかし、やがてポセイドンも力尽きた。暴れ狂っていた指輪のなかに取り込まれていく。
怒れる海神を封印し、イリスの指で光り輝く指輪はさらに透明度を増したようだった。最初の海のような、混ざり気のない美しさをまとっている。
ロートが静かに話しかけた。
「終わったみたいですね。無事でなによりです」
その瞬間、イリスは糸が切れたように膝をついた。ため込んでいた息をぜいぜいとはきだす。
顔色は明るかった。
「あんたも見てないでちょっとは手伝いなさいよね。ボーっとしちゃって」
「僕だって心の中で応援していましたよ。届かなかったみたいですけどね」
「どんなに必死な願いも相手に伝わらなきゃ意味がないでしょうが。せめて声に出しなさい、声に」
「じゃあ、頑張ってください」
棒読みのセリフ。イリスは左手でロートの頭をパコンと叩いた。
ロートは大げさに頭を押さえてみせるが、口元は笑っていた。
イリスがいう。

「ロート……あんたそんな趣味があったのね」
「趣味？」
「殴られて笑っているなんて……」
「そんな変な性格はしていません」
ポセイドンを封印して気が緩んでいたためか、ロートの声は本人が思っているよりも大きくなってしまっていた。ロートの頭に、天井からこぼれおちた小さな石がパラパラとぶつかる。
視線を上に向ける。真一文字に亀裂が入り、今にも崩れ落ちようとしていた。
「あ……」
「ばか、何やってんのよ」
いうが早いかイリスが出口に向かって駆け出す。一度通った道のことは忘れない。地図を広げるまでもなかった。
ロートは、なんとかイリスに追い付きながらいいかえす。
「こういう宝は、本体を取ったらダンジョンが壊れるようにできているんですよ」
「どうして街を救った英雄が死にかけなきゃいけないのよ。活躍したらもう用済みってこと」
誰にいうでもなく、イリスが中空に問う。
返事はない。
だが、答えは完成したばかりの蒼い指輪から出された。
イリスの右手が白い光に包まれ、横を並走していたロートの体をも巻き込む。視界は一面真っ白だ。一点のシミも、影も見えない。光だけに覆われている。
「これは」
「たぶん、この指輪の力みたいね。使えない弟子なんかよりもよっぽど便利だわ。あたしが目をつけていたお宝なだけあるわね、もう大好き」
目からハートマークが飛び出そうな勢いだ。
ロートは白い空間の中で、気苦労をのせた溜息をついた。恋は盲

目、ということか。せめて対象は人間にしてほしかったが。
世界の始まりのような純粋な場所が真っ青に染まった。海に飛び込んだ時のように気泡が浮かんでは消えていく。どうやら海中にいるらしかった。
視覚と聴覚だけが分離し、魚のように自由に泳ぎ回る。潮の流れるさまを眺め、銀色にきらめく小魚の群れを突っ切る。頭上を見れば、大きな木の船底がある。
太陽の光は充分に海底まで満ち渡り、つもった砂の中に埋もれるいくつもの貝殻をさらけだす。その一つひとつに物語があり、命があった。
ヒトデが小さな貝を食べようと、じりじり移動する。食物連鎖のより底辺にいる生き物は、必死に後ろ向きで逃げ出した。広大な海の、命をかけた微小な戦い。
ロートはどんな宝石よりも滑らかに輝きを放ち、躍動する光景に見とれていた。
命あるものと、無いもの。
それぞれに価値があって、失えば二度とは戻ってこない。
だからこそ一度きりの姿を精一杯、残そうとする。
「師匠……見たらどうですか？　すごく綺麗で神秘的ですよ」
「あたしはこっちの方が好きなの。好みの違いに口を出さない」
イリスは指輪を撫でまわしている。重なった指の隙間から洩れていた光が細い線へとかわり、収束した。
それに伴って、海の中にいた球体は猛スピードでアスマークの空を横切り、小高い丘へと降り立った。

# エピローグ

夢から覚めるように、急に現実へと引き戻される。月光を浴びた真夜中の空気は肺に突き刺さるほど冷たかった。

「ずいぶん遠くまで来てしまいましたね」

「そうねー。アスマークともお別れかしら」

眼下では夜に浮かぶかすかな明かりがありのように動いている。主に住宅街のある大通りぞいと、ルイスやヘアンのいる教会のあたりに集中している。

朝日が昇るまで、まだ時間があるようだ。夜はまだまだ長い。

イリスがロートの様子をうかがいながらいった。

「あたしは別にいいんだけど、ロートはちゃんと挨拶してこなくてもいいの。行っておかないと後悔するかもしれないわよ。ヘアンちゃんにだってお別れしないと」

「あー……」

ロートは空に瞬く星を見上げた。何年もの月日を旅して、ようやくたどり着く一筋のメッセージ。

そして、悲しげに微笑む。

「でも、時にはお別れをしない方がいいこともあるでしょう。旅は一期一会。いつも師匠がいっていることじゃないですか。いつかまたアスマークに来るようなことがあれば、その時に僕は改めて自己紹介をすることにします。一人前の冒険者になってから。僕が独り立ちしたらの話ですけど。だから、今はこのまま去りましょう。逃げることになるかもしれないけど、僕らはきちんと役目を果たしました。その内手紙でも書いて指輪を持っていくことを事後承諾で許してもらいましょうよ」

「あんたがそこまでいうのなら、止めはしないわ。ただし後悔だけはしないこと。うじうじしていたら置いていくからね」

「百も承知ですよ、そんなこと」

夜風がふたりの旅人の髪をないでいく。一人は誰もが目に留める艶やかな紫の長髪。一人は印象深いショッキングピンクの短い髪。

物語の一部始終を天から見下ろす満月は、薄笑いを浮かべながらゆっくりと太陽へバトンタッチする。毎日、毎日。姿を変え、形を変えながら陽は昇り夜を迎える。そんな無限の繰り返しの中で生まれた一つの物語は、海で暮らす人々の記憶にしっかりと刻み込まれた。

一夜限りの幻のような奇跡。

偶然に通りかかった自由な旅人によって、複雑に絡み合った歯車がまわりだした。ねじまき時計はイレギュラーな軌跡を描きながらも、時を示し続ける。それが運命という名の必然に縛られているのか、奇跡という名の偶然の上に成り立っているのか、それはだれにも分からないけれど。

淡い銀色を背中に浴びながら、また新しい出会いへと歩き出す。

人生という儚い時計が疲れたというその時まで、人は進み続ける。その足跡を、世界中に残しながら。

## エピローグ（後書き）

これでおしまいです。
ご拝読、ありがとうございました。
もし彼らの冒険がお気に召しましたら、感想など残していってくださると幸いです。

## あとがき

なんか、まだ完結していなかったことにようやく気がつきました。
せっかくですので、あとがきを。

えーと、まずこのテーマ――つまり海ですね、にした理由から。
ｄｅｐａｒｔｕｒｅｓというゲームがありまして。
これがなかなか面白い（攻略サイト見ましたけどね）。
その中で港町を舞台にしていたので影響されて書いてみました。

まだへたっぴで、キャラもたたない、世界観もない、みたいな状況ですけど。
応援、よろしくお願いします。（これだけでした～）

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1489i/

---

プレシャス　×　オーシャン

2010年10月8日15時27分発行